建長寺山門（境内に「桜花の碑」が安置されている）

会報
特攻
令和２年８月

第１３１号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

暑中お見舞い申し上げます・・・2
巻頭言・・・副理事長　岩崎　茂　3
各地慰霊祭参加報告
宮崎県護國神社特攻勇士慰霊祭参列報告・・・専務理事　石井光政　6
千葉県護國神社特攻勇士の像慰霊祭・・・編集長　金子敬志　5
会員等投稿
戦後75年を迎えて・・・専務理事　石井光政　6
旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者の追悼に併せ・・・理事　福江広明　8
菊池（花房）飛行場・・・会員　青木和子　11
海上挺進第14戦隊及び基地第14大隊・・・元隊員　中溝二郎　15
フィリッピン地獄の戦線・・・第14戦隊員　今井忠男　18
海上挺進第15戦隊及び基地第15大隊・・・元隊員　中溝二郎　35
海上挺進第15戦隊戦闘行動概要・・・第15戦隊員　松田兌助　38
記録にみる陸軍航空特攻と通信２・・・会員　大槻健二　44
図書紹介・・・48
連載　山ある記11・・・会員　池田康博　49
文芸欄　歌俳柳の広場
短歌・俳句・川柳・・・50
事務局からの報告等
第69回特攻平和観音年次法要について・・・51
年会費未納入の方にお願い・・・51
「靖國カレンダー」の斡旋・・・51
寄付者等の報告・・・51

挿絵提供空自ＯＢ　宇山氏

暑中お見舞い申し上げます

公益社団法人　隊友会

会長　藤縄祐爾
理事長　折木良一
常務理事　増田好平
常務理事　河野克俊
常務理事　齊藤治和
常務執行役（総務担当）　松尾幸弘
事務局長　植木美知男

公益財団法人　偕行社

会長　志摩篤
相談役　冨澤暉
理事長　森勉
副理事長　深山明敏
副理事長　熊谷猛
副理事長　白石一郎
専務理事　奥村快也
事務局長　山越孝雄

公益財団法人　水交会

会長　赤星慶治
副会長　佐賀幾男
理事長　杉本正彦
副理事長　河野克俊
専務理事　村川豊
事務局長　長谷川洋

航空自衛隊退職者団体　つばさ会

会長　片岡晴彦
副会長　片山隆仁
副会長　溝口博伸
副会長　戸田眞一郎
副会長　齊藤治和
副会長　藤田信之
専務理事　古賀久雄

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長　島村宜伸
理事長　山下輝男
専務理事　伊藤隆
常務理事　國澤輝生

東郷神社

宮司　福田勉

東郷会

会長　友國八郎
副会長兼理事長　田内浩
編集長　伊藤和雄
事務局長　足立晴夫

一般社団法人　日本郷友連盟

会長　寺島泰三
副会長　森勉
専務理事（兼編集長）　越智通隆
常務理事（兼事務局長）　冨田稔
理事　袴田忠夫

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長　杉山蕃
理事長　藤田幸生
副理事長　岩﨑茂
専務理事兼事務局長　石井光政
理事　臼田智子
理事　鮒田英一
理事　大穂園井
理事　岡部俊哉
理事　久納雄二
監事　福江広明
監事　阿部軍喜
監事　羽渕徹也

「巻頭言」

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
副理事長　岩崎　茂

日頃から、特攻戦没者慰霊顕彰会の機関紙「特攻」をご愛読頂いております皆様方に感謝申し上げます。

本年は、年が明け、間もなくして新型コロナウイルスが急激に拡散し、我が国ではあっという間に岩手県を除く全国に拡散しました。世界でも急激に拡散し、正にパンデミック状態となり、６月下旬に世界の感染者数は１０００万人を超え、このウイルスが原因でお亡くなりになられた方は50万人を超える未曾有の事態となっています。我が国では5月下旬には新規感染者数が減ってきたこともあり「緊急事態」が解除され、各種の自粛要請も緩和されましたが、７月に入り、世界では20万人／日を超える新規感染者がある状況で、全く楽観視できる状態ではありません。いつになれば安心できる日が訪れるのでしょうか？

この様な暗い雰囲気の中で、先日、東京都の上空をブルーインパルスが飛行しました。これは、今回の新型ウイルスで、２月以降、早朝から深夜までコロナ感染者の診療や看護等に従事されている医療従事者への感謝と敬意を表すことを目的に企画された飛行との事でした。５月に入り雨の多い日々が続いておりましたが、久々に晴れた青空の下、約20分間に亘り、都内の大きな病院等の上空を飛行し、多くの医療従事者への感謝と慰労、そして一般の方々に感動と勇気を与えたのでは、と思っております。

この様な状況ですので、残念ながら、今年は靖国神社での特攻隊全戦没者慰霊祭をはじめ、全国各地での慰霊行事が中止され、または規模をかなり縮小しての実施となっております。コロナウイルスの感染拡大防止を考えれば、致し方ない事と考えています。私達は、この様な時期こそ忘れてはいけない事があります。私達の現在の平和で安定した、そして豊かな生活は、これまでの多くの方々のご努力の上に成り立っています。特攻で散華された英霊の方々も同じです。私達は、是非この事に感謝しつつ、新たな生活様式に移行していくべきと考えております。

最後に、私は、この機関紙「特攻」の編集委員会の委員長を拝命しておりますが、これまでいろいろな検討を重ねつつ、なるべく多くの方々に愛着を持って拝読して頂く為の努力をしてきております。最近の「特攻」は如何でしょうか？できれば、ご愛読されておられる方々の忌憚のないご意見を頂戴できればと考えております。ご意見等は巻末の特攻隊事務局までご連絡頂きたくお願い申し上げます。

『御英霊の皆様方に感謝を捧げますとともに、一日でも早く安心できる日々が訪れますことを願いつつ！』

写真提供：航空自衛隊

宮崎県護國神社特攻勇士慰霊祭参列報告

専務理事　兼　事務局長　石井光政

令和２年３月28日（土）、宮崎県護國神社に昨年奉納された「あゝ特攻勇士之像」の前で、宮崎県出身特攻勇士に対する慰霊祭が斎行され、特攻顕彰会を代表して参列したので報告します。

３月はすでにコロナウイルスの脅威が日増しに高まり、宮崎県においても、慰霊祭斎行直前に感染者が出た関係で、参列者を縮小しての斎行となりました。その後、４月に入ってから緊急事態宣言が発令され、都道府県間の移動が制限され、４月以降の各地の慰霊祭も中止ないしは縮小実施となる直前で、まさに間一髪の参列でした。

当日は午後３時から本部宮司をはじめ、護国神社の責任役員各位、宮崎県隊友会会長及び事務局長、宮崎市議会議員各位、宮崎県神社庁参事、日本会議宮崎各位、等14名の方が参列され、山田禰宜を斎主として厳かに行われました。

本特攻像は、昨年の３月28日に、宮崎県出身で特攻で散華された陸軍28名、海軍46名の方々の慰霊と顕彰を目的として、杉田前宮司、三浦宮崎県隊友会会長等のご理解とご支援により奉納されました。

特攻勇士之像の隣には昭和19年10月25日にフィリピンのマバラカット飛行場から最初の特攻作戦で海軍の関大尉とともに出撃し散華された、宮崎県住吉村出身の永峰肇曹長の慰霊碑が建立されており、宮崎県民の慰霊顕彰への意識の高さが伺えます。

今後も各県等の護國神社や支援団体の方々のご理解とご支援を得つつ、特攻作戦で亡くなられた方々の慰霊顕彰のために、特攻勇士之像の奉納事業を進めていきたいと考えています。

祭壇が設けられた特攻像

特攻像を前にしての神事

令和２年度「千葉縣特攻勇士之像慰霊祭」に参列して

編集長　金子　敬志

１　慰霊祭の概要

令和２年５月26日（火）11時より、千葉縣護國神社において斎行された「千葉県特攻勇士之像慰霊祭」に当顕彰会を代表して参列させて頂きましたので報告します。

千葉縣特攻勇士之像

本慰霊祭は「千葉縣特攻勇士之像」が建立奉納された平成23年５月26日の日に合わせて、毎年５月26日に千葉縣護國神社境内の「千葉縣特攻勇士之像」前で執り行われているものである。

新型コロナウイルス禍のため、当日は千葉県東葛偕行会井上会員と私の２名が参列した。

式次第
①修祓
②降神之儀
③献饌
④祝詞奏上
⑤玉串奉奠
⑥撤饌
⑦昇神之儀

参列者による玉串奉奠

前日の予報では降雨が心配されたが、やや蒸し暑いものの、幸い降雨は無く、慰霊祭は式次第に従って厳かに済々と進行し、滞りなく終了した。

この後、参列者のよる記念撮影を行った後解散となった。

２　所見

今回の慰霊祭は平成23年の建立から10回目を数えるものである。

本慰霊祭は千葉縣護國神社の主催になるもので、参列者がいなくても斎行すると言う神社側の強いお気持ちによるものである。そのためコロナウイルスがあっても斎行されるものと思い、事前に確認して参列させて頂いた。

例年御案内状は送付されないで、事前の申し込みが無くとも参列可能である。

先に書いたように毎年５月26日11時より斎行され、式典の時間は約30分である。多数の方のご参列を御願いしたい。

竹中宮司と記念撮影

戦後75年を迎えて（慰霊について考える）

専務理事　石井光政

父の日記から

ここに一冊の日記がある。私の父が戦地において昭和18年に記したもの。遺品を整理していたら出てきたが、昭和16年以前とこの18年の日記だけが残っていた。17年は多分沈められた船（軽巡由良：昭和17年10月25日沈没）と一緒に失くなったのだろう。19年以降は書く余裕が無くなったのかもしれない。

その18年の１ページ目、つまり元旦のページには「宮城ヲ離ルルコト二千七百余浬ノ大東亜戦争最前線航空基地「ブイン」ノ地ニ目出度クモ昭和十八年ノ元旦ヲ迎ヘタ・・・」とあり、ラバウルとガタルカナルの中間地点のブーゲンビル島に居た事が分かる。

戦局は転換点を迎えた頃。目の前のガ島では死闘が繰り広げられており、父の日記の記述も「頑張ってほしい」から「早く撤退を」に変化している。

その後２月末にはラバウルに異動するが、当時、父はラバウル海軍航空隊の一つである第２０４航空隊の通信長をしていたので、太平洋地区の他の情報もいろいろと入ってきていた様である。毎日どこで戦いが有り、戦果はどうで、友軍の損失がどうか等も細かく書いている。昨夜楽しく懇談した戦友が今日は未帰還となり胸が痛いとの記述も散見される。

撃墜した米軍パイロットの尋問にも立ち会って以下のような会話をしたと書いてある。

「Ｑ：ワレワレ日本人ニ対シドウ考エテオルカ

Ａ：我々ハ神ノ恵ミニヨッテ生キテオル。日本人トテ同ジデアル。戦場デナケレバアナタ方ト私トハ大イナル友デアル

Ｑ：戦争ハスキカ

Ａ：否

それを通じて必要以上の同情が湧くのを禁じ得なかった。」と書いている。

また、ラバウルに異動した直後の３月４日（ガ島撤退後のラエ輸送作戦が失敗し、大きな損害を受けたことに対し）の記述には

「未ダ二千名近ヒ漂流者ガアルラシイ。何トイフ悲惨ナコトダ。上級指揮官作戦指導ノ拙劣ハカクモ重大ナル結果ヲ生ズルトイフコトハ大イニ銘記スベキコトダ。断行ト無鉄砲トヲ間違ッテハコマル。陸軍ハ未ダニ一段作戦ノ夢カラ醒メテナイノカモ知レヌ。」

と書いている。

回天の創始者である黒木大尉が軍令部等を批判し「問題は全く人にあり・・特に中央の怠慢は国賊というの外なし。戦局今日に至りし所以、全く物にあらず人にあり」と言われたとのことだが、当時の現場の大尉クラスの上級司令部等に対する感覚は似ていたものがあるように思える。

５月22日には山本連合艦隊司令長官機が撃墜されたとの緊急電報を受領し、どうか無事で居て欲しいと書かれている。また、ラバウル等では「マラリヤ」や「デング熱」にかかる隊員が多く、父の分隊でも41名中26名がこれらに罹患し、「これでは戦は出来ない」と嘆いている記述もある。うち一名は亡くなった。ラバウルは南方戦線の中でも都会だがそれでも大変な生活だったのだと想像させられた。

定期的に、同期が何名戦死し、いま誰が何処で戦っているかとか、ラバウルで誰に会って嬉しかったとか丹念に記録されている。

父は自衛隊が設立されたとき航空自衛隊に入ったので、私が防衛大学校に入学した時に自分の後継者が出来たと思ったのかとても喜んでくれた。しかし、私が

父と一緒に住んだことが少なかったせいか戦争の話をあまり聞いた記憶がない。乗っていた船が沈められた時に艦橋に居て、周りが倒れていき、爆風で顔全体が血だらけになったが眼鏡をしていたお蔭で失明しなくて済んだ、運は紙一重だというような話を聞いた覚えがあるが、この日記に書いてあるようなブインやラバウルの話を聞いた覚えはない。

もっと多くの話を聞いておけば良かったと今更ながら反省している。父は海軍兵学校66期なので戦後は毎年6月6日に同期が靖國神社に集まって昇殿参拝ののち一泊旅行に出掛けていた。父が参加できなくなってからは私が代理出席していたが、その同期会も皆さん高齢になったため解散した。

各地に有った約６００の戦友会も構成人員の高齢化に伴ってすでに多くが解散している。毎年８月15日や春・秋の靖國神社の例大祭には元軍人と思われる方々が来られ戦友を偲んでおられたが、今はだいぶ少なくなりさみしい限りである。

靖國神社にて

特攻顕彰会の事務局は今では飯田橋だが、昨年１月までは靖國神社の遊就館内に有ったので、毎日拝殿にお参りしていた。今も近いので時折参拝する。

毎年８月15日には、夏の太陽が照りつけ蒸し暑いにも関わらず、靖國神社には多くの老若男女が参拝に訪れる。今年は終戦75周年でもあり多くの方が参拝されることだろう。

昨年は閣僚の靖國神社への参拝がなかった。国会議員は国に対する責任があるのだから、亡くなった英霊に対しては敬意を表すために靖國神社へは参拝してもらいたいものである。マスコミは誰が参拝したではなく、だれが参拝しなかったかを報じるべきと思う。武道館で行われる全国戦没者追悼式の首相式辞に対しても、アジア各国への謝罪の文言が入っていたの入っていなかったのと、入っていないことが問題であるかのように伝えるマスコミもある。慰霊祭での首相式辞になぜ謝罪を入れなければならないのか。慰霊祭とは戦争で亡くなられた方への追悼を行う場であり、そこで謝罪などの文言を入れるのは日本のために亡くなった方への冒涜ではないかと思う。

父の日記に、皇居のみでなく靖國神社に対しても折に触れて遥拝をしていたとの記述を見て、先の大戦で戦った方々の心の拠り所が何処にあったのかを考えると、我々子孫が先人を大切に思うならその気持ちを尊重しなければならないのではないかと改めて考えさせられた。

慰霊について

今年が終戦75周年であるのを機に、特攻に関することも含め、いろいろな所で先の大戦の戦争体験を聞こうという動きが活発になってきているが、得てして報道されるのは戦争の悲惨さ、軍人の横暴さ等を強調するものが多く、それを全てと取れられてしまっては日本のために命を懸けて戦った先人に申し訳ない。彼らが日本の事を思い、戦場では同期や部下、戦友を案じ、最善を尽くしていたことをもっと理解出来るようにすべきと思う。

「国家防衛の志を同じくして・・・」とは防衛大学校の学生綱領の一節だが、先人もこの気持ちで戦ったのだと思う。不幸にして戦には敗れたが、彼らを忘れず、感謝し、尊敬し、日本は我々の手で守りますと誓うことこそ彼らへの最大の慰霊であると考える。

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者の追悼に併せ、現地戦跡等を探訪

理事　福江　広明

一　追悼式中止の連絡を受けて

令和二年四月四日（土）、鹿児島県鹿屋市今坂町・小塚公園内に建立されている慰霊塔前において「旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」（以下「追悼式」）が斎行される予定であった。

しかし、年初から発生した新型コロナウイルス感染予防の観点から、当該追悼式は中止となる。前月には、東京都慰霊協会が主催する東京大空襲の日に合わせて開催される「平和の日記念式典」、政府主催の東日本大震災の追悼式が相次いで中止。こうした行事の参列者には高齢者が多く重症化するリスクを回避する上で適正な対応と言える。その一方で主催側にとっては苦渋の決断を強いられたはずである。

鹿屋市役所から追悼式の斎行中止の一報を受け、鹿児島への出張を取止めることを思案していたところ、追悼式が予定されていた当日、慰霊塔階下に献花台を設置するとの知らせが届いた。これを一つのきっかけとして、鹿屋市内の特攻関連戦跡等を訪れ、それらの現況を把握することを主な目的に鹿屋行きを敢行した。

これは、その際の行動概要及び若干の所感を記述したものである。

二　空陸路により鹿児島・鹿屋市へ

四月三日、穏やかな日和の下、羽田空港を出発して一路鹿児島空港に向かう。

鹿児島空港は、我が国南西域の島嶼防衛及び南海トラフ対応等、安全保障上の極めて重要な拠点の一つ。昭和四十七年、現在の地に開設されるまでは、鹿児島市の中心にほど近い鴨池地区に在り、戦争中は海軍航空隊鹿児島基地として運用され、特攻隊の出撃基地でもあった。

追悼式を主催する鹿屋市は、鹿児島県大隅半島の中央部に所在し、桜島から南東へ約二十キロに位置する人口約十万の都市である。鹿児島空港及び鹿児島市内と同市の間の公共交通機関としては、バスとフェリーが運航されており、ちなみに鹿児島空港から空港バスを利用した場合の所要時間は約百分と関係ウェブ上で案内されている。

三　鹿屋市内の特攻戦跡を巡る

その日の午後に鹿屋市内に入り、鹿屋市観光協会のホームページに掲載された関連情報を基に、いくつかの前大戦の戦跡を巡ることができた。その一つ、桜花の碑（野里国民学校跡）を紹介する。

大戦末期、「桜花作戦」を行った神雷部隊は、鹿屋市に所在した野里国民学校を宿舎としていた。同部隊の特別攻撃隊員たちが別れの盃を交わした、この地に碑が建てられている。揮毫したのは、当時報道班員として神雷部隊と生活を共にした作家・山岡荘八氏である。

山岡荘八氏揮毫の桜花の碑

神雷部隊とは、特攻兵器「桜花」、その母機一式陸攻、その掩護戦闘機から成る、昭和十九年十月に編成された第七二一航空隊の別称とされている。

なお、今年三月二十一日、北鎌倉の建長寺内で挙行予定であった神雷部隊慰霊祭もウイルス禍にかんがみ、取り止めとなった。

四　鹿屋航空基地史料館の見学できず

旧串良海軍航空隊基地出撃戦没者慰霊塔が建立されている平和公園（鹿屋市有里）から海上自衛隊鹿屋航空基地史料館に移動。閉館については事前に知らされていたが、鹿屋市内にあって特攻にかかる資料及び展示において同館の存在は大きく、どうしても立ち寄りたい場所であった。

海上自衛隊鹿屋航空基地史料館

同館内には特攻隊員に関する貴重な資料だけでなく、旧日本海軍創設期から先の大戦、現在の海上自衛隊に関する展示品まで陳列されていると聞き及ぶ。開会中であれば、ベテラン館員によるわかりやすい説明を受け、見識を深めることができたと思う。

五　例年追悼式が挙行される公園にて

追悼式会場となる小塚公園は、鹿屋市役所から約三キロ、海上自衛隊鹿屋航空基地に隣接する鹿屋航空基地史料館からは約二キロの場所にある。当該公園の正面から徒歩三分の小高い場所に高さ十一ｍの正式名称・旧鹿屋海軍航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊碑が聳え立っている。

訪れた当日は気温二十度以上、微風といった気象状況の下、慰霊碑の周囲で開花し始めた桜花が英霊を偲ぶ趣ある風景を作り出していた。

なお、『特別攻撃隊全史』には旧鹿屋基地について次のように記載されている。

小塚公園内の慰霊碑

「鹿屋基地は海軍の沖縄作戦における中継基地となり、昭和二十年二月第五航空艦隊司令部が置かれた。昭和十九年七月には空地分離で基地は九州空の管轄するところとなっていた。この基地から昭和二十年三月十一日、菊水部隊梓特攻隊が西カロリン諸島ウルシー泊地の米機動部隊攻撃に突入したのを皮切りに…（中略）…合計六十七隊、四四七機、七五五名の猛攻を記録している」

六　碑文に込められた歴史認識

慰霊碑の基礎部分には石碑が設置され、次の碑文が刻まれている。

『今日もまた黒潮おどる海洋にとびたちゆきし友はかえらず

慰霊塔直下の石碑

ゆきし友はかえらず
　太平洋戦中　鹿屋航空基地より飛びたち肉弾となって散った千有余の特攻隊員
　御霊よ安かれ　必らずや平和のいしずえとならん』
　碑文について先の史料館に問い合わせたところ、長きにわたり衆議院議員として活躍された後、戦中・戦後に鹿屋市長を努められた永田良吉氏が揮毫されたとのことである。
　この碑を眼にした時、昨年四月に同じ鹿児島県の出水市特攻碑慰霊祭に参列した際、作家・阿川弘之氏の小説から取ったとされる碑文「雲こそわが墓標　落暉よ碑銘をかざれ」を思い出した。あの時以来、碑文に大いに関心を持つようになった。いずれの碑文にも特攻の意義と英霊の鎮魂が整斉と刻まれており、特攻に対する正当な歴史認識を体現している象徴と言える。

七　来年の追悼式参列を期して

　鹿屋市内の戦跡地を後に、東京への復路便に間に合うように鹿児島空港に向かう。道すがら至る所に戦跡や慰霊碑が目に入るたびに生前の実父を思い出す。
　実父は厚労省から取り寄せた軍歴の写しによると、昭和十九年九月十五日、第十五期甲種飛行予科練習生としての初度配置先が鹿児島航空隊であったからだ。
　今年二月、当会の事務所において甲飛古武士会編纂の「甲飛古武士　栄光の翼」を眼にする機会があった。その中に『翼なき甲飛予科練』甲飛第15期のプロフィールには、次のような記載がある。
「昭和十九年九月十五日、二四，四六一名が土浦空、鹿児島空、奈良空、三重空、松山空、美保空、滋賀空に入隊。十月一，九九九名が美保空に入隊。十一月十五日、六九二名が横通校、防通校、電測校に入隊。十二月二十日、一，四二〇名が防通校に入隊。そのあと戦況悪化の影響を受けて教育訓練が中止され、小富士空、姫路空、大村空ほかの基地に転隊、戦備作業、伏竜特攻、陸戦隊等の要員として配属された。」
　この図書は、私にとって実父の軍歴と符合する貴重なものとなった。おかげで、生前実父が語らなかった戦時中の足取りの一部が掴むことができた。
　戦後七十年が過ぎた現在にあっても、関係資料の研究や調査を進めていけば関連した事実を見出すことができるのだと実感した。
　結びに、旧鹿屋航空基地慰霊祭がパンデミック事態のため、やむを得なかったとは言え中止になったことが惜しまれる。来年、追悼式が挙行される日に、格別の思いを持って再び鹿屋市・小塚公園を訪れ式典に参列することを切望したい。

（参考）　若干の所見

　大東亜戦争における戦没者のご遺族及び関係者が高齢化するとともに、我が国において少子化、就労人口の減少といった社会変化が加速化する近年、戦没者の慰霊顕彰という行為を組織的に、体系的に、継承することが困難な情勢になって久しい。
　こうした情勢変化を受けて、戦没者慰霊について我が国全体が大きな転換点を迎えていることを多くの方が承知している。しかし、現実は深刻で、将来的に戦没者慰霊に関わる諸行事及び各地に所在する慰霊顕彰施設が、急速に衰退していくおそれがある。
　したがって、世代を問わず先述の戦没者慰霊顕彰の先行き不安について警鐘を鳴らし続けるとともに、とりわけ十代、二十代といった若き世代が慰霊顕彰の行為を継承していかねばならない。
　私自身、戦没者慰霊の世代継承を図っていく上で重要となる観点が三つあると

考える。

一つは、歴史観である。いわゆる学校教育、家庭教育と共に、我が国が過去関与した戦争・紛争に関する正しい史実を、学生及び児童に積極的に学ばせ、国際常識に基づく史観を育ませる。

二つ目は、顕彰性である。若き世代が先述の歴史観を持つにとどまるのではなく、顕彰の場である慰霊祭及び追悼式への参画を促す。

三つ目は、公共性である。戦没者慰霊にかかる行事に、地域住民等の参集効果を高めるための催事を加味していく。ただし、戦没者慰霊の本来意義が決して薄れることがないように十分な配慮を欠いてはならない。

各地域の特性に応じた公共的、文化的なイベントを式典に融合し、地域住民はもとより多く方々に親しまれる工夫が必要であろう。

これらの点を今次、参列した追悼式に照らしてみると、実に良く考慮されているとの実感を持った。戦没者慰霊に関する世代継承を地道に、着実に行い得ている式典のひとつであると言えるのではないだろうか。

菊池（花房）飛行場

会員　青木和子

春爛漫。菊池歴史文化資料館「菊池飛行場ミュージアム」は孔子公園・道の駅泗水近くにある。

約束の10時より随分前に着いてしまったが、すぐに事務局長の小山内さんが来てくれ、鍵を開けてくれた。

館内には菊池飛行場や航空通信学校、義烈空挺隊等の大東亜戦争関係の資料が時系列に展示されており、豊富な写真・映像・ジオラマの他、九三式単軽爆撃機のプロペラ等も置かれている。小山内さんの説明で展示物や資料をひとつずつ見て回った。

熊本県菊池市。昭和10年着工、15年完成。旧陸軍菊池飛行場は花房台地にあったことから花房飛行場とも呼ばれている。

ここに飛行場ができたのは、熊本が九州最大の軍都であり、陸軍関係施設の多い土地であったこと、花房台が高台であること、飛行場の材料となる良質の砂利が近くの合志川・菊池川・迫間川に豊富にあったことだと言われている。

昭和16年、福岡県の大刀洗飛行場から第三航空教育隊が花房台地に移管。気象観測所や陸軍病院（衛生兵の教育訓練所でもあった）も併設され、菊池飛行場は熊本県内最大級の飛行教育隊となった。菊池電車の軌道を挟んで東西に部隊があり、昭和19年には西側が通信教育隊となる。飛行学校と通信教育隊が併設されているのは非常に珍しいことで、飛行場内には司令部、兵舎、格納庫、飛行機整備工場、修理工場、無線施設、燃料庫、弾薬庫、倉庫、食糧庫等多くの施設があった。特に航空機の整備部隊は県内ではここ

離着陸訓練の様子

のみで、戦争が拡大するにつれて増え続ける航空機の種類や部品、異なる機種ごとの整備に優れた技術で対応した。

飛行場では練習機の離着陸、空中戦、爆撃機による目標物への爆弾投下訓練、翼にある機銃の発射訓練、パラシュート降下訓練が日夜行われていたが、九州のほぼ中心に位置していた為、戦争末期には特攻隊中継基地としての役割も担うことになる。特攻隊員達は日本各地・中国・朝鮮の飛行場から一旦この地に降り立ち、機体整備、最後訓練、家族との別れを行い、最終出撃地である知覧、万世、都城東・西などへと飛び立って行ったのだ。

昭和20年5月13日、空襲警報が鳴り響く。日向沖の米軍空母「ランドルフ」「バターン」から艦載機が発艦。グラマンＦ６Ｆ戦闘爆撃機・カーチスＳＢＣ２ヘルダイバー爆撃機・ＴＢＭアベンジャー雷撃機59機による数回にわたる波状攻撃が菊池飛行場を襲った。爆弾と機銃掃射の嵐。兵舎・格納庫・教育隊校舎・教育隊給水塔が破壊され、昼頃に空爆された通信学校では数十名が生き埋めとなった。敵機は翌日にも来襲し、両日で飛行場と通信学校合わせて69名の犠牲者が出た。

【熊本県警の公文書記録】

敵機来襲状況

米軍機が撮影した空襲を受ける菊池飛行場

5月13日ハ、3：30都井岬１５０マイル付近ニ敵機動部隊現ワレ、艦載機グラマンＦ６Ｆ、カーチスＳＢ２Ｃ、４機ナイシ70機ノ大、中、小ノ編隊ヲ以ッテ鹿児島県、宮崎県ヨリ３０００ナイシ７０００ノ高度ニ依リ、６：14ヨリ６：45マデ、８波、ノベ88機県下ニ侵入、主トシテ航空基地、並ビニソノ周辺地区ニ急降下、波状攻撃ヲナシタルガ、一部列車、一般民家ニ機銃掃射ヲナシタリ

5月14日ハ、都井岬南方ヨリ北進セル機動部隊ヨリ艦載機グラマン、カーチス来襲前日同様６：08ヨリ６：30マデ11波ノベ７１３機県下各地ニ侵入、主トシテ航空基地、軍事施設重要工場ヲ急降下、波状攻撃ヲナシタルガ、一部県下各地主要都市、付近町村ヲ盲爆、機銃掃射ヲナストトモニ列車、船舶、停車場ヲ機銃掃射ヲナシタリ

菊池飛行場関係の被害状況

5月13日　投下爆弾数70発（菊池飛行場）・70発（通信学校）、死者69人（両所計・内通信教育隊34人）、重傷者11人（両所計）、家屋全壊14棟（両所計）、半壊12棟（両所計）、半焼（飛行場）、罹災者15人（通信学校）・36人（飛行場）、飛行機炎上３機（飛行場）

5月14日　飛行場ノミ　投下爆弾数12発、重傷者１人、行方不明１人、家屋半壊１棟、兵舎半壊１棟、航空機大破炎上５機

昭和20年6月14日沖縄の敗戦が濃厚となると、九州各地に展開中の対空無線要員に本土決戦に備え菊池飛行場への集結命令が出る。飛行場は特攻中継基地、本土決戦の要として機能し続け、そして終戦を迎えた。残されていた本土防衛特攻用の古い飛行機は、全て米軍にガソリン

焼却処分を待つ本土防衛特攻用の飛行機

をかけられ燃やされた。

戦後は食糧増産の国策により、開拓団が入植し、広がる滑走路や破壊されたままの格納庫や掩体壕が残る荒れた土地を手作業で開墾。兵舎等の施設が利用され、中でも高架給水塔は国立病院の給水施設として、また開拓団の生活用水として付近数百戸の民家と工場用水を賄い、平成19年の使用停止まで地域の生活を支え続けた。

ミュージアム見学後、小山内さんの案内で車で５分程のところにある菊池飛行場の遺構を見学する。

まず飛行場側の営門・立哨所基礎、開隊記念碑、高架給水塔（平成22年９月市指定文化財に登録）、木造格納庫基礎、ガソリン貯蔵庫、油倉庫を見る。これらの遺構は徒歩でまわれる位置にあり、あちこちに機銃掃射の跡が残っている。

地域を支えた高架給水塔

次に行ったのは満開の桜の下にある飛行場営門と少年飛行兵戦没者慰霊塔。ここには面会に来ていて空襲の犠牲になってしまった家族の碑もある。

【建立の由来】碑文より

戦後の食糧増産の国策に添って昭和21年２月11日菊池開拓団として50名の者が此の地に入植、富の原の邑造りの為には此の地に眠る諸々の霊を慰め空襲に依って散華した尊き戦死者の英霊を永遠に慰めることが原点であると信じ、昭和32年５月12日慰霊塔を建立して年々慰霊祭を行なって来たが永年の風雨に暴され慰霊塔の傷みが激しくなった為建立30周年を迎えるに当り戦友会と地元住民の協力に依り改めて此の碑を建替えるものである。

昭和62年４月５日

少年飛行兵戦没者慰霊塔

【碑文】

戦後開拓者として、昭和21年２月入植した我々は、此の地に永住せんが為には、昭和16年７月開隊された菊池飛行場の地に眠る無縁仏を供養することが何より大

切と考え、物資欠乏の折り総力を挙げて、昭和26年４月慰霊塔を建立し祭りを行ってきた。昭和32年戦友会より、戦時中米軍機の大空襲、または訓練中、尊き命を国の為に捧げた多数の少年飛行兵、特別幹部候補生の冥福を祈り、共に英霊を慰めたいとの申し出により、以来区と戦友会と合同で平和日本の礎を築いた故人を偲んで、祭りを行って来た。この慰霊祭を後世に伝えるために毎年４月第一日曜日を慰霊の日とし、地域の繁栄を願って、執り行っていく事を誓うものである。

平成14年４月吉日　富の原中央区

続いて通信教育隊跡地側へ移ると、開拓記念碑や陸軍航空通信学校菊池教育隊と第三航空教育隊西部第九十九部隊の鎮魂碑がある。この鎮魂碑は営門より移設した２基の門柱で作られており、ここでも毎年５月13日に慰霊祭が執り行われる。そして防火水槽、風呂場跡、給湯管、医務室石門。こちらは小山内さんの私有地内にあり、親子２代に渡り守ってきた遺構だ。最後に近くの会社の敷地内にある円形の大型防火水槽を遠目に見学した。

菊池飛行場ミュージアムは開館６年目という比較的新しい資料館だ。しかし展示資料は充実しており、なんといってもすぐ近くに保存状態の良い遺構が密集しているという強みがある。紙の上での知識にとどまらず、実際に歩いて勾配や距離感をつかみ、見たり触れたりする事ができるのだ。

小山内さんには幼い頃に暮らした将校兵舎を再現し、もっと広いミュージアムを作るという夢がある。「そこに赤トンボ、隼、呑龍もあれば良いですね」。現在は衛兵立哨所の復元計画もあり、少しずつ夢に近づいている。

QRコードは菊池飛行場の地図です

第一四戦隊及び基地第一四大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一四戦隊は、昭和十九年九月上旬に、幸ノ浦基地で訓練を行なっていたが、十月五日付で宇品で正式に編成となった。

通称は暁（比島では威）第一九七五三部隊と称し、戦隊長は陸士五四期の江島光記大尉であり、第一中隊長は曽篠裕中尉（陸士五六期）、第二中隊長は沢部信彦少尉、第三中隊長は金山秀雄少尉（いずれも陸士五七期）で、副官は豊福（藤田）義郎見習士官（幹候一〇期　二〇年一月少尉）、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一一期の見習士官、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

十月六日に、本部及び第一、第三中隊の戦隊主力は宇品を先発し、翌朝門司に到着、ここでⓁ舟艇を積載して後、本部及び第一中隊は大博丸、第三中隊は泰山丸に分乗、八日に門司を一三隻の船団で出航、途中台湾沖航空戦退避のため伊万里湾に仮泊した後、二十二日高雄に入港、二十三日に高雄港を出航した。

二十六日、本部及び第一中隊の乗船していた大博丸（整備中隊及び基地第一九大隊の一部も乗っていた）が、バシー海峡で米潜水艦の魚雷攻撃を受けた。そして辛うじて沈没は免れたが、半没状態に陥り（このときは船団中六隻が沈没または大破の損害を受けた）、乗員は全員海中に飛び込み、他の僚船に救助されたが、大博丸は大破、以後独力航行でルソン島まで到着した。戦隊員はこの時の被害により二名が戦死したが、残員は救助され十一月一日にマニラに入港上陸した、しかし積載していたⓁ（約四十隻）は総て損壊した。

第三中隊の乗船した泰山丸は十月三十一日に無事コレヒドール島に着き、ここで人員とⓁを揚陸した。

後発船団となった第二中隊は平安丸に乗船、十月十六日に宇品を出航し十一月十一日にマニラに着いた。

同月十二日、戦隊はコレヒドールに集結するため、前夜到着した第二中隊をはじめ本部・第一中隊は平安丸に乗船マニラを出港、十三日朝コレヒドール沖（カブカーペン泊地）に碇泊し積載していたⓁの泛水（はんすい）作業中、米軍機による攻撃を受けて火災を起こし、銃撃により四名が戦死（バターン半島カブカーペン東方海上）、数名が負傷、又積載されていたⓁ（三十隻）も一挙に失われたが、海上に飛び込んだ将兵は救助され、戦隊はコレヒドールに全員の集結を終った。※泛水（水に浮かべる事）

二十日にコレヒドール島から残存Ⓛをマニラ港に廻航し、二十二日迄にバタンガス州のカルパン半島マビニーに逐次展開し、同月二十三日には全員の配備を完了した。

なお、この戦隊は、江島戦隊長の発案により、攻撃の威力を倍加させるため、艇に百kgの爆弾を搭載することになり、第二海上挺進基地隊長堤仙雄中佐の認可を得た後、バタンガスの海軍航空隊が積み残している百kg爆弾を譲り受け、十二月十七日より一部のⓁに装着したが、全艇に装着できないうちに米軍の空襲を受け、積み残されていた爆弾は誘発爆発してしまった。

二十年に入り、一月末にナスグブに米軍が上陸してきた際第一五、一六戦隊は当面の出撃戦隊とされ、一四戦隊は一三戦隊とともに次期の予備とされ、一月、二月には第一五、一六戦隊が主として出撃をした。

しかし、十二月十四日、一月三十一日、二月十日の三度「出撃準備」の命令を出されたがその都度取り消された。

このため基地に留って待機の態勢をとっているうちに、米軍の一部はバタンガスを目指して進行し、三月になるとカルパン半島東面のマイナガ基地も北部より攻撃を受けはじめ、一方二月上旬にタール

湖北方のタガイタイ方面に降下した空挺部隊を含む戦車隊も進出してきた。

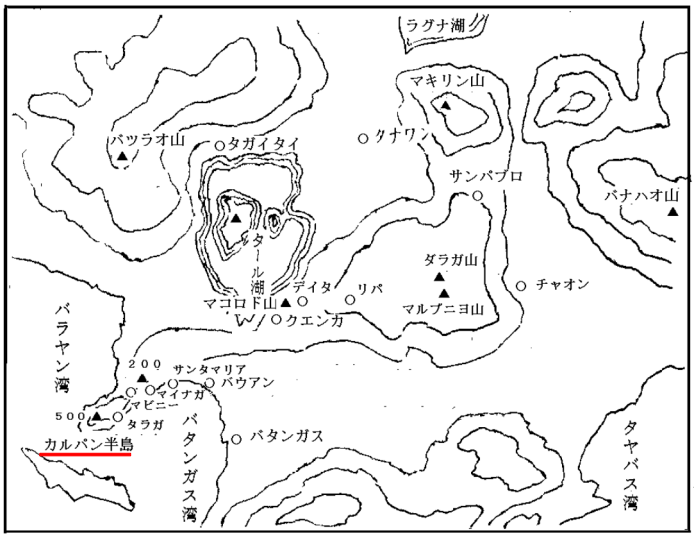
半島の北東部マイナガ基地近くの第一中隊は、㋑により半島中部の第三中隊壕に移動を行なったが、途中で海没した㋑もあり、海上及び陸上で損害を出した。

なお三月十二日には㋑の一部を残して全部処分し第一三戦隊と共に第一四基地大隊長の古川大尉の指揮下に入り陸戦の準備に入った。（残した㋑は後の逆上陸戦に使用）この間にカルパン半島一帯が、米軍により背後を遮断される形になった。三月十一日、基地大隊長は第二基地隊本部長堤中佐より、〃当面の敵を殲滅して「クエンカ」に前進すべし〃との命を受けた。

このため第一三戦隊と第一四戦隊の両舟艇部隊をバタンガス湾を航行して敵の後方、カルパン半島東の「サンタマリア」附近に逆上陸させ逆に包囲の態勢をとって本隊の戦闘に寄与することになった。

三月十三日夜、第一四戦隊の福田捨喜、辻哲郎、山田武各群長（いずれも幹候一一期）が指揮する舟艇群は戦隊員十数名程度および攻撃に加わる基地隊員を乗艇させて出発、第一三戦隊の吉原少尉の指揮する第三中隊と海上にて合流する計画であったが、両者の出発時刻が食い違ったためか予定のとおり集結できず、独自にバウアン近くに上陸した模様で（会敵したかは不明）、爾後クエンカに前進したと思われる。

また、後述の戦隊がマルプニヨに転進の際、クエンカ方向に向かった者も加わり、同地を占領していた藤兵団市村大隊のもとで第一線としてクエンカ地区の戦闘に加わり、四月二十五日以降に九名の者が戦死しているが、生存者数名は九月にマコロド山にて終戦を迎えた。



カルパン半島の基地大隊は、海上よりの逆上陸攻撃時期と同時に一斉に反撃に移ったが、頑強な敵に阻止されて作戦は意の如くならず、甚大な損害を残して不成功に終わった。

戦隊主力は大隊本部の菱形山戦闘指揮所及び峰続きの大観峰（二百高地）において戦闘を続けていたが、米軍は半島南部に進出してきたため、大隊主力と共に完全に包囲される態勢となった。この包囲から脱出するため三月十五日以後、戦闘を継続しながらカルパン半島の中央山地を縦断し、漸くマビニー西方、半島南端の五百高地への撤退に成功した。

ここでの戦闘で基地隊及び戦隊とで一〇〇名以上が戦死した。

その後、作戦を変更して、マルプニヨ方面の兵団主力の決戦に参加することになり、三月二十七日夜隠密裏に米軍の包囲を脱し、途中戦闘を継続しながら四月六日マルプニヨ山中で藤兵団（第一七連隊）本部との連絡に成功し、以後その指揮下に入った。

四月十日頃に命により戦隊長は第一三、第一四戦隊の残存者を指揮して江島遊撃隊を編成し、マルプニヨ山付近の海軍山にて米軍及びゲリラ隊との戦闘を行なっていた。

藤兵団司令部も米軍の猛攻を受けて玉

砕寸前の状態であったが、　バナハオ山に転進することになり、四月二十八日に転進を開始した。

海軍山の戦隊員も連絡を受け、日比野大尉（第六戦隊長）が第一三戦隊や第一四基地大隊と共にバナハオに転進することとなっていたが、斬込に出撃していた隊員に連絡が遅れ、別個に行動をとらざるを得なかった者もある。途中、米軍占領地を通過するため、米軍、ゲリラ部隊との交戦も数多く重ね、江島戦隊長をはじめ多くの戦死者を出しながら、五月中旬以降にバナハオ山に到着し、ここで第一三戦隊・一九戦隊の残員等と共に第一三戦隊第一中隊長藤堂中尉、又は第一四戦隊副官の豊福少尉の指揮下に入って自活、遊撃戦等を行っていたが、二十年九月に終戦を迎えた。

カルパン半島よりマルプニヨ、バナハオに転進し、終戦にいたる過程で戦死したものは約五十名になっているが、その多くはマルプニヨからバナハオに至る過程の戦闘で亡くなっている。

こうした転戦のため、当初編成一〇四名であったが、戦死は、将校十二名、隊員（特幹）六十九名、戦隊付き下士官二名の合計八十三名であった。

海上挺進基地第一四大隊は、昭和十九年九月十七日仙台の東部第二二部隊歩兵四連隊補充隊で、特別現役志願の大隊長古川金三大尉（後少佐）の下に中隊長川崎栄一中尉、根元兵庫中尉、次藤良雄中尉、整備中隊長高橋藤七大尉で編成を完了、暁第三三二八部隊と称した。

十月二日大隊本部と第三中隊は、高津丸（第一二戦隊の第三中隊が同乗）に、第一、第二中隊は香椎丸に乗船して宇品を出発し、同月の三日に門司港で能登丸（第一二戦隊の本部、第一中隊が乗船）、金華丸等と船団を編成し、四日に門司を出て六日に上海に回航、ここで待機中の玉兵団（レイテ方面に派遣される第一師団の部隊）の一部を乗船させ、十六日に上海の外港ウースン港を出発し、海上無事に二十七日にはマニラに入港した。この船団は比島増援の第一師団を無事現地に輸送するための優速船団であった。

一方整備中隊は、戦隊の一部とともに大博丸に乗船し、十月八日に門司を出発したが、十月二十六日バシー海峡で米潜水艦の魚雷攻撃を受け、前記のように損害はあったが沈没は免れ、また乗員は救助され、十一月一日にマニラに着き、先着の本隊と合流した。

十一月十七日、大隊の本隊はバタンガス湾に面するカルパン半島のマイナガ付近に展開し、同地で舟艇基地の設営を行なっていたが、特に記録するものとして、この大隊は陸戦用として大隊砲一門をもっていた。

昭和二十年に入り、一月十五日に第三中隊は次藤中尉以下二三〇名が、振武集団に配属されることになり、モンタルパン地区に移動した。

一月二十七日に、本部、第一中隊宿営地マイナガ村に米機の空襲を受け、甚大な被害があった。

二月十八日付で、第一三基地大隊が北部アラミノスに移動したのに伴い、二十五日に第一三戦隊の戦隊長馬場大尉以下、約七十名が一四大隊長の指揮下に入る事となり、以後これらと行動をともにすることになった。

一月末にナスグブに上陸した米軍は、東進して基地のあるカルパン半島を遮断する形勢になったので、これと三月八日から激戦となり、多大の威力を発揮していた虎の子の四一山砲（大隊砲）も米軍の砲撃に破壊される等、我が方の被害も多大となった。

三月十一日前記（戦隊の部参照）の堤中佐の命令に基づき、マイナガ前面の米軍を包囲殲滅の目的で三月十三日夜、海上より逆上陸部隊を出撃させ、同時に各中隊は一斉に反撃に移ったが、頑強な敵に阻止されて作戦は意の如くならず、甚

大な損害を残して不成功に終わった。

その後、米軍は半島南部に進出してきて、大隊主力は完全に包囲される態勢となったため、三月十五日この包囲から脱出、第一三基地を経由して半島南端の五百高地に集結し、米軍の攻撃に備えた。

尚、一部の中隊（根元中隊）は大隊本部との連絡不能のため独自で敵の戦線を突破し、クエンカ地区に至りここにて戦闘を続けていたが、四月中旬マルプニョの大隊に復帰した。

当時、藤兵団各地の戦闘状況は全く不明であったが、リパヒル方面、藤兵団地域の戦況がにわかに活発となり、連日砲爆撃がくり返されるのを遠望された。

この情勢から作戦を変更して、マルプニョ方面の兵団主力の決戦に参加することになり、三月二十七日隠密裏に転進を開始、途中戦闘を継続しつつ四月六日マルプニョの兵団本部に到着、直ちに第八六飛行場大隊等を併せ指揮しリパ地区隊としてダラガ山近くに至り、同地の防禦を担当することになった。

更にバナハオ山に移ることになり四月末出発、途中米軍占領の平地を通過するため、米軍、ゲリラ兵との交戦を続けながら五月十一日バナハオ山麓に到着、兵団司令部と連絡できた。大隊は更に五月二十一日よりバナハオ頂上を踏破して北側の山麓に至り、七月下旬までここにて自活を続けながら遊撃戦を展開していたが、七月下旬以降は極度の食糧の欠乏により、各地区に分散して自活の行動を行なっていた。

大隊は九月二十六日藤兵団の第二梯団としてルクバンに下山し、米軍の管理下に入った。

こうした転戦により、大隊は総員約八九五名であったのが、約七四〇名が戦死し、生還者は約一五五名といわれている。

フィリッピン　地獄の戦線
第十四戦隊員　今井　忠男

はじめに

陸軍船舶兵特別幹部候補生として、十七歳四ヶ月で入隊、香川県豊浜、小豆島において約五か月…基礎訓練、その後約一ヶ月間、広島県江田島で特別訓練を受け、フィリッピンへ。

宇品、門司港」出港

堂々の輸送船――江田島で約一か月間、「軍事機密」の特別攻撃艇、秘匿名㋒に搭乗し、高速接舷、編隊航行など昼夜にわたる訓練を重ねた後、十九年十月、我々第二中隊は、「平安丸」七千トンに乗船、門司港で㋓を受領積載し、兵員、食糧等を満載して出航。十三隻の船団は、必要な距離、間隔をとり、海軍の護衛艦数隻と共に一路南下、祖国を後にフイリッピン向け正に堂々の輸送船団であった。

船内には、それぞれのハッチに高さ一米余りの棚が作られ、筵（むしろ）一枚の広さに十人位が完全武装の姿で詰め込まれた。

人の熱気、船特有の臭気、身動きもできず、まるで蚕棚を思わせる。堂々とした輸送船の外観に比べて内側はこの有様であった。

敵潜水艦に雷撃されることを警戒しての航海であったが。緊張感を漂わせながら数日後には沖縄付近を、そして十月末、台湾「基隆」港に寄港した。

バシー海峡

「基隆」港を出港、九十九％敵潜水艦に撃沈されることを覚悟の魔のバシー海峡を越えねばならない。

船団護衛のため、上空を旋回していたわが軍の飛行機も姿を見せなくなった。

薄暮ともなれば、敵潜水艦が出没し、「雷跡発見！」の声も二度聞いた。幸い取舵一杯で難は免れたが、魚雷に直撃された僚船は、わずか百米のところで轟音と水煙りを上げて……それが消えた後には船影のかけらもない。

輸送船団は汽笛も鳴らさず、灯火もつけず、停止することもなく、十ノット前後で進む。

マニラに到着……無事に辿りつくことは「絶対不可能」等と言われてきたマニラに到着できたことが夢のように思えた。十一月十一日、灯火管制された港も街も真っ暗。軍装袋を担いで、爆撃の硝煙消えやらぬ瓦礫につまづきながら、宿舎に当てられた教会についた。コンクリートの廊下に宿泊したがその硬さなどは問題でない。

「平安丸」被爆沈没――十三日、空襲による㋹の被害を避けるため、戦隊本部、第一中隊とともに再び無傷の平安丸に乗船、夜明けのマニラ湾を南下、右にバターン半島、正面にコレヒドール島が見える。何故か船が停った。振り返れば、マニラ上空は機影こそ見えぬが黒煙が蒙々と噴き上っている。大空襲を初めて遠望する。

甲板にシートで秘匿していた㋹の降下命令が出た。

各人毎の舟艇ナンバーは決められていなかったが、クレーンを操る船員に一人一人手信号を送りながら㋹と共に下船してゆく。十数隻も下したころ、今度こそ自分も合図を送ろうとして㋹の艇首を支えたとき、「作業中止」の声が響いた。敵艦上機とおぼしい戦闘機三機が急降下してくる。

「隠れろ！」甲板上のハッチに飛びこむと同時に猛烈な機関銃の射撃音が連続して響く。すぐ横の兵がうなった。左腕から血が噴き出し、よく見るとその腕はぶら下っている。「衛生兵！」と呼ぶ声がする。足元の錆びた甲板が砲弾でえぐられ光っている。

瞬間、三回にわたって耳をつんざく爆発音、思わず両手で耳を抑え、「南無妙法蓮華経」を三回唱えた。妙に心が落ちついてきた。苦しい時の神頼みとはよく言ったもの。耳から手を離すと「ザーッ」という浸水の音が聞え、右舷が傾いていくのがわかる。

「退船！退船！」江島戦隊長の特徴ある重い声が聞えてくる。甲板に飛び出せばそこは正に修羅場、皆初めての経験に違いない。右舷エンジン部分からは猛煙が上り、全身血に染まり身動き一つしない者、ふき出る血を押え乍ら走る者、ロープを海に投げて競って降下するもの。

一本のロープに数珠つなぎ、上部の一人が落下すれば、その下方は全部海中に……海面までは七～八米もある。ままよ、鉄帽ぬいで小脇にかかえ、靴もぬいだ。なぜかぬいだ靴をキチンと揃え直したことが不思議に思った。思い切って飛び降りた。浮かぶ材木や、人には幸い当らなかった。深く沈んで浮き上り、本船から一刻も早く離れることが先決。本船には㋹搭載用の爆雷が格納されている。さて、バターンを向くべきか、コレヒドールへ向うべきか迷ったが最短距離を選びバターン半島へ向かった。五十米も力泳したであろうか、新たな攻撃はない模様、足をかがめてゲートルを解き、首にゆるく一重に巻いて長々と流しながら泳いだ。教わった鮫よけ法である。

㋹も失い、凡ての軍装も失った。本船から見たバターン半島は砂浜の白い部分と山並みの凸凹がうっすらとわかる程度の距離にあった。数時間も泳いだろうか。足が立つところまで来た。海岸までは五十米、漸く砂浜に上がった。近くの小川で潮気を落し、ついでに夏軍服も水洗いして褌一つで砂の上にのびきった。特攻任務を果す前からこの有様では先が思いやられる。でもよく助かったものだ。

深夜、小型舟艇でコレヒドール島へ。

夜、マニラ湾を舟艇で再びマニラへ向い、㋹を再受領し、トラックに積載、㋹をバナナの葉などで覆って、深夜ルソン本島を陸路南下、任地バタンガス湾、マイナガ地区へ向った。トラックの前照灯

に映しだされるバナナ、ヤシの木におお われた村落の景色は、人通りは全くなく無気味な程静かであった。どこを走っているか、見当もつかない。

任地、「マイナガ」

マニラを出発して数時間も走ったろうか。薄明の中、そう高くなさそうな山裾に着いた。待ち構えていた基地隊員によって㋹を丁寧に下ろし、既に掘られていた岩の洞窟にしずしずと格納された。

マイナガは、ルソン本島の南端、バタンガス湾西方につき出たカルバン半島のほゞ中央、湾口遠く高い山脈のミンドロ島が望める。半島先端方面には第十三戦隊、対岸には第六戦隊が布陣していると聞く。第二中隊は、本部一、二、三小隊と四軒のバハイ（現地語で住居のこと）を宿舎とした。

海岸にはヤシの樹が続き、白砂の波打ぎわには打ちよせられたヤシの実が波にゆられている。

出撃訓練――㋹は一日二回、エンジン調整をしていざ出撃と言う時に備えた。訓練は当然、夜間に行われた。濠から海岸まで約百米、平地に丸竹のコロが並べられ、その上を船台に乗った㋹が基地隊員によって曳き出される。そして泛水、エンジン始動、これを繰返して行い、真暗闇の中でも声一つ出さずに出来るまで訓練をくり返した。波の高い夜も、雨の降る夜も※泛水（はんすい　水に浮べる事）

爆弾搭載――㋹には、爆雷、百二十kg二個のほか、百kg爆弾を積載することになった。「一艇もって二艦を葬れ」とのことである。「二艦目を葬るに際し、艇もろとも自らも潔よく散れ」との命令が下された。

爆弾は、約一m、太さ約三十cm、飛行機のない飛行場大隊から運ばれてきたもので、真黒い胴体に黄、赤、白の三本線と瞬発信管は無気味に感じた。操縦席の真前に据えつけられたが、波を被っただけでも爆発する代物である。これで完全な「決死隊」となった。

出撃準備命令――突然「緊急出撃準備命令」が出た。戦隊長が各中隊を巡視。「愈々、出撃の時は来た。訓練に訓練を重ね今日を待った。今夜こそ貴様らの命は貰った！」今までの苦労は当然この日のためにあった。覚悟はしていたものの緊張感が漂う。泛水は訓練どおり。爆雷や、爆弾にはそれぞれ信管もとりつけられた。更に緊張感がたかぶる。「準備完了！」報告する声が上ずっているように思える。

波の音がひと際ざわめく中、操縦席に座って沖を見つめれば、無性に故郷のことが偲ばれ、家族の顔が次々と想い浮ぶ。詩情が詩情をよぶ。自らの生きざま、いや、死にざまを見つめるには又とない場でもあった。さまざまなことが考えられるものである。ともあれ、「十八歳の命を国のため潔く散らしたい。」これが結論であった。

夜明け前、「出撃準備解除」の命令がでた。長い長い夜であった。一旦、覚悟はしたものの、ほっとする。一日命を延ばして㋹を元どおり濠内へ。

翌日もまた同じことがくり返された。本来なら昨日散っているべき命であったろうに……。同じようなことを想い返しながら次の命令を待つ。またもや解除、こうなれば緊張も稍ゆるみ、反対に作戦の方針に対する不安感まで出てくる。

敵、大艦船団、湾口沖を北西へ――一月上旬頃、敵の高速魚雷艇三隻が断りもなく湾内を高速で走り回りだした。艇首には37㎜砲が座り、艇尾には星條旗がはためく。飛行機エンジンで時速四十ノット以上と聞く。敵ながら全く雄姿である。

翌日も湾内を駆け巡る。対岸に向けて三隻が並んだ。途端に37㎜砲の速射がはじまる。対岸に布陣する第六戦隊に対してである。舟艇濠に命中したのか、猛炎

がふき上る。

対岸、岬の沖合いに小島があった。どの部隊が守備していたかは知らないが、これに対して夜を徹して艦砲射撃が行われるのを見せられた。

夜空に谺（こだま）するその音はまるで遠雷のようであった。一夜明ければ、島の高低は平担に、緑は全くないまでに変わっている。

ある日、湾口はるか、大小様々の敵艦船団が昼間から堂々と進路北西に向けて進んでいく。それは日暮れても延々と続き、灯火までつけて。これを見て敵のバタンガス湾への侵攻は薄らいだのでは……と感じた。一月下旬頃には、南部ルソン西海岸ナスグブに米軍の一部上陸中とか。

㋹破壊――そのような情況下でも迫真の訓練は続いたが、三月十二日、㋹破壊の命令がだされた。「軍事機密」と艇座に刻まれた愛艇、運命を共にと日夜整備手入れしてきた㋹を自分の手で沈めるのである……。重大な作戦変更を余儀なくされた戦局を感じる。爆雷、爆弾の信管を抜き取り、低速で約一キロ湾内に出て、底板をハンマーで破り、浸水を確かめ海中に飛びこむ。

立泳ぎしながら海中に姿消す艇に敬礼、泳いで基地に帰る。服装を整え整列した。そこで直ちに新しい命令が待っていた。

「陸上挺進斬込隊を命ず……」であった。

陸上挺進斬込隊として

海上から陸上へと改名された戦隊員は、南部ルソンの雄、「藤兵団」へ配属となり、「三人一組をもって敵陣地へ斬り込みを敢行する」こととなった次第である。

受けてきた中等学校軍事教練は、主として大陸における陸戦を目的とされていた。自信こそないが、行軍、小銃、軽機関銃、擲弾筒射撃、歩哨、斥候、突撃、遭遇戦はもとより野営、炊飯にいたるまで、訓練は真面目に重ねてきた。配属将校の命により、時には小隊長として指揮刀まで吊って……はっきり言って自分は陸戦を喜んだ一人であった。が、海上挺進隊としては、まさに陸に上った河童である。むき出しの黄色火薬（四kg）の中央に穴を開け、そこに信管をつけ、手榴弾二個その他個人装備として、刀、けん銃、雑嚢、水筒、携帯天幕等があった。

地区部隊の集結

バタンガス湾、マイナガ地区に布陣中の各部隊は、カルンパン半島南端五百高地（パナイ山）に集結することとなった。

観測機――マイナガを後に、とりあえず西方二百高地に移ることになった。この頃観測機とよばれる旧式練習機のような高翼機が単機で低空を旋回しだした。戦闘機と異なって軽快な飛行機である。敵も愈々飛行機が不足しだしたなと思った。これはとんだ大間違いで、これには電波探知器を積載しており、林の中にかくれていても鉄帽や銃などが反応しておよその部隊人員が判るという。

そのはずで、機が上空を旋回しだすとまず真っ白の発煙弾が迫撃砲で打ちこまれる。機は中空において、無線で連絡するのか、二弾、三弾はきわめて正確、直後は集中砲火となる。これには随分悩まされたものである。

二百高地――マイナガ地区を放棄して、半島の中央二百高地頂上付近に移動、其処でそれぞれが深さ五十cm程の穴を掘って夜明けに備えた。

昼前、急造の山上陣地から下方国道を望むに敵戦車部隊約三十台、轟音と砂塵をまき上げて走る。火炎放射器が凄まじい。辺り一面掃射しながら安全を確かめて前進する。敵は、夜間は全く動かない。

基地を離れてからは、個々に飯盒炊さんをすることになった。煙は一切出せない。部隊の所在が判明するからである。

五百高地――二百高地から転進、五百高地に入り、ここではいろいろなものを

食った。いや食わざるを得なかった。
普通のトカゲはうまいが、目に鮮やかな紫色に光るものとか、トゲの出た茄子を食べると四十度近い高熱が数日続く。
安心して食べられた故郷の菜園の有難さを思う。
部隊の集結は終り、古川大隊の主力第十三、十四戦隊、基地大隊約三百名、藤兵団司令部マルプンヨ山へ向けての転進が始まる。

「マルプンヨ山」へ転進

転進という言葉は初めて聞くが、どうも負け惜しみのように思える。明らかに不利な戦況の中、わが軍は夜間だけ行軍する。昼間は目立たぬよう秘匿に神経をとがらす。昼間動くのは敵兵とわが軍の斥侯の目だけである。転進する道は険しい。まして山中の夜間行軍の連続である。
今夜の転進は再びマイナガ地区に戻り、国道を横切るのだそうな。そしてマルプンヨへの転進中一番危険地帯と聞く。
この夜、「絶対に音を発してはならない」との厳命があり、水筒、刀、けん銃も布きれを巻くなどの措置が示された。
問題の国道は、各小隊毎に横断した。部隊全員緊張の度合いがよくわかる。つい先日、戦車隊が西へ進んだ国道、敵襲に備えて後続部隊は臨戦体制を整え、順次横断を繰返し成功した。国道そのものが危険な感じすらしたが、横切るときには音もものかわ、只走った。
結果として、最後まで一発も敵の発砲はなかった。
山裾を急ぎ足で歩いた。朝方からの雨が降り続く。鉄帽を仰向きにして尻に敷き、刀を抱え、その上に携帯天幕をかけて雨水をさけて眠り、夜を待つ。十分もすれば尻が痺れてくるので左右交代する。勿論炊さんもできず、生米をかじりながら夜を待つ。靴の中はズクズクの水浸し、靴を脱げば足は指先まで真っ白にフヤけて、穴のあいた靴下をしぼっても乾かすすべもない。雨が上がり、太陽が顔出せば天幕の中は熱気で蒸れて息も苦しい。夢うつつの中で天幕を手で突き上げて換気を繰返す。
「突撃！」――夜はまた歩く。どこをどう歩いたか、平地の畑道を、ヤシ林の中をそして夜明け前、深いヤシ林の潅木の中に身をひそめた。昼過ぎ頃から観測機の旋回がうるさい。元凶にイライラがつのったのか撃墜の命令がでる。低空で飛来、部隊上空に来た時「撃て！」一個分隊が一斉射撃、機はグルッと反転、一瞬ゆらいだ。エンジンが停止したので墜落すると思ったが姿勢を立て直しヤシ林すれすれ、グライダーのように滑空して行った。耳をすましたが墜落音は聞かれなかった。
暫くすると、ヤシ林はずれの畑の向う側からしきりに小銃の乱射が始める。この時、豊福副官が枯れた沢の岸に生えている木にスルスルと登りだした。江島戦隊長が「豊福やめろ！」耳もかさず、三～四米登ったところでひょうきんに手をかざし偵察、その数約三十人とか。わが方、このヤシ林に約五十名、全員が河岸に銃列を敷き、敵の接近を待った。
続く乱射はすぐ近い。「撃て！」頭を上げると、中腰でカービン銃を連射してくるゲリラが四～五十米先に目撃された。昼間、敵と銃火を交わすのは始めてである。誰の弾が当ったのか数名のゲリラがひっくり返る。約二十日にも及ぶ苦闘が一挙に反撃できる時とも思えた。
その時「突撃！」。飛び出したのは十数人だったろうか。ガキの頃の戦争ごっこ、学校教練でこそ何十回となく突撃、白兵戦を経験したことはあったが、本物はこれが初めて、その後も「突撃」はなかったので、自身、太平洋戦争における突撃はこの一回だけ。……
ともあれ、敵は予想外であったろう。わが軍の攻撃にすぐ反転して逃げだした。攻める位面白いものはない。畑の凸凹で

足がもつれながらも走りに走った。宙を行くとは正にこのこと、けん銃は射ちつくしてしまった。

敵はヤシ林に逃げこんだ。敵が見えない。そこで「引け！　深追いするな！」一瞬とまどったが、一目散に引き返した。

今度は後ろから乱射される羽目となった。当たりそこないの弾が連続して目の前の土をハネ上げ耳元をかすめる。

引く時の後ろ弾はほんとにこわい。同じ距離を攻め、そして引いた筈だが、引く時の距離と時間はとても長く感じた。攻めることの易さ、引くことのむづかしさをつくづく知った。時、三月三十一日、忘れもしない。

藤兵団司令部到着――四月上旬、目的の司令部に着いた。が所詮ここも戦場である。昨日は、司令部正面まで米軍が押し寄せ、火炎放射をしたとか。一きわ硝煙の臭いがきつい。司令部は岩盤をくり抜いた洞屈で、戦傷病者が数十人、壁ぎわにもたれたり、横になっている。司令部側方、ヤシ林の凹地に繋がれた栗毛の乗馬が三頭、静かに草を食んでいた。

久し振りの炊さんで満腹もした。司令部という親ふところに入ったような安心感で実によく眠った。

数日後、集合がかかり、斬込前線基地、通称「海軍山」へ転進することになった。

「海軍山」出撃拠点へ転進

海軍山には、「食糧は全くない。持てるだけ持っていけ、どんなことがあっても夜明けまでには到着する」という。

海軍山では、すぐに「蛸壺を掘れ！」……直径七～八〇cm、深さ一m以上、そして底を横に五十cm、靴下型の蛸壺である。遅い者ほど先に被弾するという。掘るにショベル、土を上げるに鉄帽、掘り上げた土で周囲が高くなって案外早い仕上りとなった。新しい土は黒い腐葉土で覆い、入口は青草でふさいだ。尻には枯葉を敷き、土の匂いの中で足を伸ばして土壁にもたれれば心は落ちつく。

これぞ「自分で掘った墓穴」である。

斥候①――某夜、Y見習士官に随行を命ぜられ将校斥候に出た。稜線を約二km も歩いたろうか。遠く曳光弾が尾をひく。発射音は遠いが、「敵は近い！」という。自らの耳を疑った。再び曳光弾、「やはり近い！」という。そして「もうこれ以上進めない。暫らく状況を見る。」見るといっても見えるものは何もない。並んで斜面に腰を下して黙っていると咽喉が鳴る。小さく咳ばらいをした。「馬鹿！」その声の方が余程大きい。クシャミが出そうになって、口と鼻を押えたが、中途半端なのが一回出た。途端、顔すれすれに拳が空を切った。それで終いではない。ニューッと出た手で横っ面をツネる……。疑う余地はない。「戦場恐怖症……」兵よりも将校がよくこれになった。不思議な現象である。三十分足らずの静寂の後、「このままでは危険だ」そうな。引き返して基地に戻った。戦隊長に対する報告内容は一切知らない。

この人の軍刀の鞘（木製で鞘部を皮で覆ったもの。）は木部がポロポロに割れていたが、これは鞘ごと、兵士を殴った回数が特別多いためと噂されていた。

斥候②――数日後、「須藤」と斥候を命ぜられた。敵は昼間、部隊を秘匿していることはまずない。

相当広範囲に亘って索敵、視察したが敵影は全くない。途中、斬込みに出撃したであろう某部隊の装具が崖下に積まれていた。小量の米、塩もあった。新品の夏軍服、図嚢、双眼鏡、ノート、鉛筆を頂戴してきた。飛行場大隊のものかもしれない。飛行機に積載する機関銃の砲身に溶接で脚をつけ、地上戦闘用に改造したもの一丁と弾倉二個もついでに持ち帰った。中隊長は「これは大きな戦果だ。機関銃はお前が持て……」蛸壷の中に立てかけたが、小銃の数倍の重さ、当然威力

は大きく心強さを感じた。

斬込み、第一選抜――四月二十日頃、海軍山の前方、四～五kmもあったろうか。

「明日の夜、十一時を期して構築中の敵重機関銃陣地に斬込みを敢行、重機を破壊するか、奪取してこい。」との命令を頂いた。第一選抜されての斬込、誠に名誉であると思った。

出発に先だって戦隊長に連れられ、戦友の小尾、須藤らとわが軍の曲射砲陣地の壕内から角股（つのまた）眼鏡を見せて貰った。真正面の稜線上には上半身裸の黒人兵四～五十人がピッケルや、ショベルを使って陣地構築に余念がない。

テントはないが、重機関銃は掘り上げられた赤土部分にある筈と聞く。敵陣地左下方の草原斜面や、前面の地形も頭に入れた。緊張感が湧いてくる。

そして「斬込み敢行の夜十一時には、曲射砲二十発を打ち込む。昼間から照準を会わせておくし、命中度は百％全弾が必ず命中する。同時に手榴弾を全部投擲して斬込み、目的を遂げよ」とつけ加えられた。尻こそばゆい選抜理由も承った。

握り飯二つ、水筒、手榴弾各三発、銃剣一本のみの軽装である。

与えられた任務の重大性と斬込第一号に一段と身の引き締るのを覚えた。

「成功を祈る」との戦隊長の激励を後に勇躍、海軍山を出発した。

山を降り、稜線を三つ程越え夜が明ける。敵陣地下方の谷間に隠れて夜を待つ。握り飯も食べて水も飲み残るものはない。日暮れて八時頃だったか、夜光時計をにらみ乍ら斜面を進んだ。眼鏡で見た草原はせいぜい草丈三十cm位のものと思えたが、現場は背丈もあるススキが叢生する。獣道位の狭いところを星明りで歩くが、無造作に歩くと、踏みつけたススキの茎が「ペン！」と折れる。その音は緊張感からか意外と大きい。

時計は十時に近い。敵陣地の左下方はまだか……ゆっくりと這うようにして進む。と、急に前が開けた。草原と敵陣地の際である。正しく敵陣である。蛍の灯のようなものがあちこちに、それは敵兵の喫う煙草の火で、甘い香りが流れてくる。わが心臓の鼓動が敵にまで聞こえるのではないかと思える位高鳴りを覚える。急ぎ二～三m程後ずさり、ススキの中に入った。味方の砲撃の巻き添えにならないためと、まだ三十分程あったためである。

三人の打ち合せは已に十分。敵を目前にしての三十分はとても長い。海上出撃の場合と異り、情緒的な思いは不思議となかった。

出撃の機に恵まれなかった生命がここにある。その代りを今こそ果たし、戦史に長くその名を止めたい思いはあった。

敵兵がススキの原の際まできて小便すると葉っぱや茎は派手な音をたてる。

五分前となった。三人で手を握り合った。そして草っ原を出た。三mの間隔をとった。手榴弾三発とも安全栓を抜いて並べた。鉄帽も脱いで点火の叩き台とした。これらの動作はすべて打合せのとおりである。

後、三分間は長かった。早々と首をすくめて待ちに待った。

丁度、十一時、わが方陣地より連続した発射音が数発聞こえだした。握った手榴弾に力が入る。すぐに上空を「ヒューン、ヒューン！」と弾道が呻る。一秒、二秒、炸烈しない。

目前にしている敵陣地に想像していた修羅場はない。おかしいと思った。その直後、後方の谷間で連続した破裂音が響いた。

距離誤差？　今出るべき下がるべきか、考える間もなく、横になっていたであろう敵兵が騒ぎだした。勿論英語であろう。配置につくのか走り回る様が音でわかる。

この状況の中での斬込み、突差の判断

に躊躇した。「機を失した」と見た自分は、素早く手榴弾に安全栓をはめポケットに一個宛しまいこみ、鉄帽をかぶり、二人に近寄り手で制止して後退した。これだけは打合せに全くなかったことである。二人に抵抗はなかった。約二～三十ｍもススキの中を後退したころ、敵陣地正面からの重機の重い音、すごい猛射であった。その間に一目散に元の道を下りた……。次は、左下方でわが方に向けられると考えた。案の定、ススキ原の中に乱射が続く。それ弾が耳元をかすめる。

味方陣地からの再発射はなかった。勿論、事前打合せ、指示の中にもそのことは全くなかった。

夜明けまで山麓の谷間で待機したが、すっかり夜が明けた頃、火炎放射か、ガソリンを撒いて火をつけたのか、ススキ原の野焼きが始まった。

青い草原が音をたてて黒煙を上げながら燃え拡がっている。どう考えても斬込めるチャンスはない。日暮れまで待って帰隊に移ったが、疲れとともに足どりは重かった。

夜明け頃、戦隊長の前に整列したが、戦隊長の平素の温顔が厳しい。

「曲射砲の命中予測は外れたが、その後で何故斬込めなかったか」という。わが真意は、

「命中率百％が０％、寝ている子を起されてしまった。」と云いたかったが、軍隊では云い訳は何の役にも立たない。

この時、真ん中に立っていた「須藤」が倒れた。芝居ではない。二昼夜余りの間、一食（二食分を一度に喰べてしまっている。）と水だけ。疲労困憊して倒れた須藤、そのお蔭で不成功ながらも帰隊したその苦労を判ってくれたのであろうか、「ご苦労、しばらく休養しろ」

蛸壷の中に入ったが、無念の頭は冴えて休養などできるものか……。

昼過ぎ頃、戦隊長に呼び出され、状況を詳しく報告する機会が与えられたが、一発だに命中せず、かえって寝た子を起す結果を招いてしまった誤算に対する噴懣を戦隊長自ら又しても繰り返され、結局「よく判った」と最後に一言。

かくして第一選抜の斬込は、全部隊注目の中、残念ながらも失敗に終った。

迫撃砲――敵、重機陣地はいつの間にか移動してしまったが、四月下旬頃、置き土産に迫撃砲弾が海軍山に落ちだした。発射音は近い。

鬱蒼と茂った大木で昼なお暗い斜面の陣地は炸烈する砲弾の破片でだんだんとそがれて、空が見えるようになり、辺りが明るくなってきた。破片は大小さまざまであるが、大は二十㎝にも及ぶ。変形で縁は剃刀の刃のように鋭い。梢で炸裂したものは「ヒューン！」と回転音を発しながら落下してくる。触ればまだ熱い。

再び斬込み――四月二十九日、天長節を期して一斉斬込の出撃命令がだされた。目標は敵陣地、幕舎、戦車、橋などとされ、「小林」　「小尾」と三人、軽装で海軍山を後にした。途中までは、前回斬込の時のコースを辿りながら、曲射砲が撃ちこまれた谷間を通過、下界を目ざして歩いた。

まる二日歩いた。山腹から望むるに、下方山麓に沿って道路が見える。たまにジープが玩具のように走っている。戦車相手では手榴弾では通用しない、目標は「クルマ」とした。秘匿場所、三人の間隔、先頭通過車両に対する第一発は右方の自分が、第二発は真中の「小尾」が、第三発は左方の「小林」が投擲する順序も決め、その後は全弾を投げてかい滅することにした。山から平地に下りる際、五ｍ近い垂直の崖があった。却って安全道と考え、夕方までの時間を利用して蔦を数本宛よってつなぎ、これをロープ代りに一人ずつ降りていった。路側の斜面、草の中に身を伏せるところまで匍匐（ほ

ふく）して前進、車両のくるのを待った。漸く左方からエンジンの音がかすかに聞こえてきた。手榴弾の安全栓を抜いた。伏せた顔の下に並べ、緊張感がよぎる……。

近づくにつれて轟々たるエンジン音、草の中から目だけ出して接近を待つ。何台くるのかわからぬが手榴弾を握りしめた。先頭車、予想もしなかった車両である。見上げるつい鼻先を通過するのはタイヤなのか、キャタピラなのかさえもわからない。それが砂塵をまき上げながら猛スピードでつぎつぎと走り過ぎていく。これでは手榴弾の効き目も疑わしい。投げそびれている間に約十台位が通過してしまった。（後で判ったが、これは十輪の兵員輸送車であった。）崖下まで後退し、三人で話したが皆、判らないという。

これまで見てきた日本のトラックは背が低く、四輪か、せいぜい六輪、スピードも遅い。見上げる十輪車のスピードは想像もできなかった。

けれども二度の失敗は許されない。トラックを諦め、暮れかかった山裾の潅木の中を約一km、下方に歩いた。ヤシ林の中、ラジオの音楽らしいものが聞えてくる。幕舎が二つ、灯りもついている。中にいる人数不明、今度は一斉投擲を打合せ、五十cm程の草の中を這いながら約三米間隔に散った。前方、三～四十m、もっと近づきたかったが発見されたらそれまで、鉄帽を脱いで固定、手榴弾の安全栓をぬいて三発を並べた。

軽やかな音楽は相かわらず聞えてくる。「今度こそ成功間違いない」と確信した。

第一弾に点火、思い切り投げた。隣を考えている余給はない。とにかく三発をぶっ続けに投げた。三人、三発宛が爆発してくれたのであろう連続した炸裂音が響いた。

敵兵の悲鳴とも合わせ手榴弾の威力はとても頼もしく感じた。投げ終るや、腰をかがめ乍ら左方へ走る敵兵の姿が見えた。幕舎の中に入って与えた損害を確認する余裕もなかった。崖まで息せき切って一目散、途中、ジープらしい二台が現場方向に走っていった。

夢中で蔦を手探り、一人ずつよじ登った。小林が少し遅れたが、二人でひきずって崖上に上げ、無事揃った。そして稜線を走りに走った。ヘトヘトに疲れて座りこみ、わざと軽量にするため少しだけ残していた水筒の水をいっきに飲んだ。

小林は、もうこれ以上動けないという。手をひいたり、尻を押したり、木の枝を帯革にかけてひっぱったりして数時間歩いたが、ついに気力を失った。せめて海軍山近くまでと思ったが、挺子でも動かないようになった。夜明け、大木の下にもたれさせ、木の葉っぱで秘匿してきたが復員名簿にないところをみればここで死亡したものと思う。元気な頃は、故郷は伊那の勘太郎の近くだそうで威勢のよい男だったが……

翌日、昼頃海軍山山麓に到着した。小川の流れが嬉しかった。斬込みに失敗したこの前は苦い水、今度はうまい水。二人で腹一杯飲んだ。少し上流に歩くと死臭が漂う。数人が川の中に下半身を、一人は上腕部を水につけ、それぞれ水中部分は白蝋のように真白の原形を止めているが、地上部分は蛆虫に覆われ白骨間近い。蛆虫は水ぎわ部分まで蠢めき数匹ずつ流れていく。

わが陣地に近づくにつれて死臭は鼻をつく。なんと海軍山は出撃前の姿は全くない。欝蒼と茂っていた樹木は枝もなく、幹は裂け、根っ子まで傾いている。燃け焦げた硝煙の臭いもきつい。

自分が掘った蛸壺を探すのに苦労する。落葉と土で殆んど埋まっていた。

戦隊長洞屈の中から人の気配がする。それは同時出撃して一足早く帰った中隊長他十数名の斬込隊員であった。お互いの無事を語りたかったが、それどころか、

斬込の状況、小林の容態を報告しても真剣に聞いてもくれない。そして「本隊は既にバナハオ山に転進した。壕内の米をできるだけ携行して後続せよ」との通信筒があったと聞く。

天長節を期し、全軍出撃と見せかけ、その間に本隊は移転してしまったのである。

夕暮れまでに約二十人が集結したが、約三十人が帰っていない。夕飯は久し振りの飯盒炊さんとなったが、溜り水は赤く濁っている。出撃中の迫撃砲弾の凄まじさが清水の色まで変えてしまっている。

「バナハオ山」へ転進

海軍山からバナハオ山を眺めると、茫々たるヤシ林の続く遥か彼方、真夏の空に山の形までがうっすらと見え頂上付近には霧がかかっている。その佇まいはとても南国の山とは思えないものを感じた。途中の平地はすべて敵の手中にあるという。軍装を整え、（戦死者の残した銃、弾などを集めて）日が暮れてから出発、昨日帰った道を下りていった。

稜線を一隊は音もなく下りていった。勿論尖兵は出ているが、敵との遭遇は全くない。夜明け前、一隊は、稜線上を稍々右方に下りたところに仮泊する。自分と小尾は直ちに前哨を命ぜられた。

前哨――約五百m、下り坂の稜線を下って見通しのきく、しかも右下方に通じる小道の分岐点を選び、そこに一軒だけ建っていたバハイ（家屋）に入った。

疲れもあり、小尾と交代で見張りをすることにした。小尾は長身で口数も少く、シンの強い男だった。腸をこわしており相当疲労の色が濃かった。スコールがきたがすぐに上った。

竹壁にもたれ、うつらうつらとしながら監視中、物音がして「ハッ」とした。見れば、右下方坂道を一人の老兵が滑って手と膝をついている。見て驚いた。小銃の先に白い布をつけて、自分の気配に感づいたのか、左右にゆっくり振っている。思わず「動くな！」老兵はびっくりして銃とともに両手を上げた。これは明らかに投降兵である。バハイを飛び出すとともに抜刀して構えた。彼は手を下ろした。刀を納めるいとまもなく近寄り、瞬間、殺意も感じたが、見すえると、自分の父親位の年輩、星二つをつけた一等兵である。暫し言葉につまった。

「どうした」

「部隊にはぐれました……」

「その白いものは」

「敵を欺くため……」

「残弾は」

「ない……」すべてほそぼそとした小声である。

これ以上、言葉もない。彼にして見れば、わが子位の一下士官が苦しい闘いの中、今もって意気盛んなことが不思議に思えたに違いない。

「旗をとれ。この奥に入っても戦死者の白骨だけだ。食糧もない。この稜線をまっすぐに下れ。」と諭す余裕もでてきた。頼りない敬礼をしてトボトボと下りていった。

直後、老兵が上ってきた方角で人の話し声がする。どうも友軍に思える。耳をすませるとやはり日本語に聞える。一人で小走りに下りていった。

カーブの手前で「オーイ」と云ったら、下からも「オーイ」と云う。潅木の下り坂の曲り角でバッタリ鉢合せ、見て驚いた。先頭数人、ゲリラの顔々。相手もびっくりした顔だった。瞬間共に、背を向けた。

こちら上り坂、一寸走ってヤシの木に身を隠した。ゲリラは一旦下りたものの一人と見たのか銃の乱射が激しい。すぐ近くの潅木の枝葉がとび散る。耳元をかすめる。手榴弾を二発続けて投げたら乱射は止った。急いでバハイに引き返し、「敵だ！」と大声を出しながら、稜線上

を隊本部へ向けて走った。

途中、小尾がついてこない。小尾は、「疲労のため、急坂手前の深い草の中にかくれた」という。隊本部に直行、状況を報告したが、乱射音と爆発音を聞いて既に軍装を整えていた。小尾は、「今井が急坂を上ったすぐその後、三人のゲリラが銃を構えながら追っかけていったので、どうなるかと心配していた」と云う。ゲリラはそのまま、中隊の秘匿場所に気づかず、稜線を奥に入ったものと思う。

老兵の雨上りの足跡を追ってきたゲリラの一隊だったに違いない。老兵はとんでもないものを誘導してきたものだ。

その夜、ゲリラとの遭遇もなく中隊二十余人は稜線を下りていった。

再び、ゲリラと交戦――スコールの中をどう歩いたかわからないが、平地のヤシ林に出た。愈々危険地帯ときく。夜明け方、三軒のバハイに分宿を決められ、「小尾」、「高橋」、「丸山」との四人で一軒のバハイに入り、久方ぶりの高床に体を横たえた。一番手の監視は望むところ、すっかり夜が明けた五時頃であったか、小尾が窓下で用を足し帰ってきた。

眠い目を開いて見れば、中隊長、小隊長のバハイは同じヤシ林の中でも潅木に覆われた中で屋根しか見えない。自分らのバハイは見通しのよいヤシ林の中の一軒家、窓から顔を出して半眼監視中、ゲリラの一人が小走りにバハイに近づいてくる。ゲリラは真新らしい小尾の大便を目ざとく見つけた。ヤケに目つきが鋭い。けん銃は彼に向けていたが射つわけにはいかない。彼の目が窓を見上げた時、自分の目と合ってしまった。

横っとびに元来た道を走り去った。もののの一分もたった頃、こちらを向いて銃声が聞えだした。中隊長に報告する間もなく三人を起し、臨戦体制を整えた。自分と高橋は窓から、小尾と丸山は壁を破って据銃、ゲリラの数は、約二十人。ひたすら近づくのを待った。

敵銃の乱射が始まった。周囲の壁と床はすべて巾一cm位の竹で編んだもの。弾丸が数発入ったらそれは正に豆を煎るようなもの、狭い室内を派手な音をたてて走り回る。ほんとうに当たらないのが不思議だ。すぐに丸山が呻った。押えている大腿部から血が噴き出している。

高橋は無闇に撃ちまくった。「ネラッテ射て」丸山の銃を借りて先頭の一人をひっくり返した。

この時、不思議なことが起った。

ゲリラがこちらから見て右方を乱射、移動を始めたのだ。すかさず、盲貫銃創を受けた丸山を高橋と二人で止血、引きずって裏側の竹壁を蹴破った。偶然ポッカリと開いた穴から脱出、バハイを蔭にヤシ林を後退したが川に出くわした。巾は四～五m、水面までは崖で二mもある。スコール後の濁流のため水深もわからない。その頃、銃声は一段と派手になっていたがわが方には一発もこない。

丸山を川岸の凹地に横にして急ぎ枝葉で隠した。手榴弾一個と刀を渡し、彼の小銃と残弾数発と代えた。丸山はそこで死亡したものと思う。

川辺を急ぎ足で少し上ると川に下りる細道があった。そこに直径三十cm位の丸太の流木が斜めに横たわり、その上を水流がもり上っている。高」とともに水垢でヌルヌルの流木を抱え、水を呑みつつ、向う岸についた。そしてさらに上流へ走った。川岸はヤシの木がところどころ、右方は水田で、三～四十cmの水稲が育っていた。

スコールによる余り水が土手の水路を溢れ、滝のようになっている。その裏側はポッコリとえぐられたような洞窟があり、二人並んで座れる程の広さであった。

昼過ぎ頃から次第に滝の水が減りだした。生米をかじりつつ、大声も出せず、水音の中で耳寄せながら過した夕方まで

の一日は心細く長いものだった。只、ひたすら夜を待った。暮れたのを確かめ外に出た。

方角もわからぬが、バナハオ山へはとに角この山麓の川は下らねばならぬと思った。

二～三百ｍも歩いたろうか、人の気配にヤシの木に身を隠し、けん銃を構えたが、薄明りの空に鉄帽が丸い。なんとそれは小尾であった。小尾は「バハイを飛び出したすぐ、ゲリラの銃向と反対に走った。川がありそこにかかっている木橋の付根の草の中に隠れた。その橋上を中隊長、小隊長、石塚、その他十名余が走って渡るのを下からかい間見たが、どうしてもついていけなかった。間もなく銃声が一段と厳しくなった。日暮れを待って今しがた、同じバハイにいた三人の友を確認のため、行ってみたら一人もいないし、裏側にポッカリ穴が開いていたので再び橋に至りこの方向をとった」という。

小尾の事情がよくわかった。中隊長以下の一行は、それ以降生存の話しは全く聞かれない。渡橋直後、全員戦死したものと推定できる。

運、不運など、どこにころがっているかわからないものではある。

敵地横断一か月――中隊長、小隊長も消息不明、三人で転進する心細さ……およその方角で見当つけて歩いた。翌晩だったか、右手甲部に貫通銃創を受け三角巾で吊った石田とも一緒になった。傷口は已に蛆虫がわいて臭いもきつい。昼間は潅木の中とか、廃屋の中に寝た。動くのは夜のみ、夏空といってもヤシの葉っぱで空さえも見えない。たまたま見える南十字星も夜中には真上になって正確な方向すら決め難い。

時々、場所によって見せるバナハオの山は雄大でまだ遠い。

敵前、数メートル――平坦なヤシ林の中に一条の強いライト、その光源にはエンジン音が響く。判らないが発電機であろう。ライトに透かされた影を避けるため百米余り離れてしすしずと進む。

突然、小尾が「おっ！」といって壕らしいところへ落ちた。小さな声で、「ひっぱってくれ」という方向に近寄ろうとした時、数メートル先で懐中電灯が二つ、「カチッ」という音まで聞えた。四人の姿が照らし出された。

小銃を天秤にかつぎ、髪は伸び、ボロボロの軍服の四人がおそらく敵の目にも奇異に映ったであろう。されど、お互いは敵である。小尾が濠内を右方に大股に腰をかがめて馳けていくのが瞬間見えた。他の二人は後ろに退くのが見えた。途端、電池が消えて槓杆をひく音が二回、咄嗟にヤシの根っ子に身を伏せた。乱射が始まった。曳光弾も混って低空の弾道が耳元をかすめる。

後方では敵の手榴弾が炸裂している。彼我の距離は余りにも近い。このままじっとしている訳にはいかない。小尾が走った方向に移動しようとしたら、ヤシの枯葉に触れて音がした。すぐに又乱射、小銃は役に立たないし、手榴弾は点火の火花で自らの位置を知らせることになる。

思いつきで近くのヤシの実を拾い上げ、左方、ライト方向に投げた。枯葉に当りころがる音が派手で、乱射の方向が変った。その隙に右方に突っ走った。

百ｍ以上も走った時、ジープが二台、発光源方向に猛スピードで走る。そのライトにすかせば、目前には十㎝間隔、横に張られた鉄条網。これを越えれば果して脱出できるのか、却って敵中に入ることになるのかもわからない。手の甲で触れてみたが電流は来ていない。数段毎に登った。「ギイィ」ときしむ。二ｍ位の高さだったと思う。とび下りると道路で、これを急ぎ横切りヤシ林を走った。

そのはずれは水田がひらけ、稲が膝位まで育っていた。

山頂を雲でかくしたバナハオの山が黒々として月明の中、正面に見える。あぜ道を急いだが、三～四十m先に人の気配を感じる。敵とは思えない。滑っては水田の中に手をつく、中々追いつけない。幻のようにさえ思えた。三十分も歩くとヤシ林に辿りついた。

とに角疲れた。すぐに休みたいが、あぜ道に残した足跡を考えると、ここらは危ない。二～三百m入ったところで、ヤシの枯葉を数枚拾い集め音もなくその上に抑向いて寝た。

一人になってしまった心細さと一人になった自由さを交錯させながら……そして考えた。

生と死――人間、誰しも生への執着はある。未知の死への恐怖からは逃れたい。けれども極限に近い日々が続けば常識も崩れてくる。戦局の不利は確かであるが、さりとて自らが生きるために卑怯未練の振舞いはできない。潔よい最後は飾りたいが、一人二人のゲリラとの刺し違えは相手不足。

真夏の太陽の下、身動きもとれず、食い盛りの腹はペコペコで目も眩む。

次々と戦友は死んでいく。息だけは確かにしているが死臭は漂う。

負傷者に対する介抱も、死者に対する埋葬も十分にできない。

死体は二日もすれば蛆が白骨にしてしまう。

今、生きていても明日まで持つか。明日生きても明後日は……

敵弾に当らぬことがほんとうに不思議に思えてならない地獄の戦場の中で生きられるだけ生きのびても、揚句、神仏の加護にも見切りをつけられ、孤独の中、惨めな死に方をするのであれば今を生きる意味もない……

日本帝国が敗けるとは思えないが、戦局の暗いことはよくわかる。

考えてみれば、人間、自分の生れた時と、死ぬ時は知らない。その間が一生であることは知っている。人生五十年といわれてきたが自分は今十八歳。畳の上での往生なら別だが、このような状況の中での死はほんとうに不安だった。

人は生かされて生きている。感謝……というけれどもこの時ばかりは「自分で、自力で生きている……」明らかにそう思った。

常日頃、生きていることを当然としているときは全く気づかぬが、こうしたときに限って妙に「生・死」なるものを改めて見直したくなる自分の勝手さも知った。

只、もう一つ知りたいのは、風前の灯とも思える自分の死期……結局、進んで死を選びこそしなかったが「生でも、死でも、どちらでもよい」何回となくそんな心境になった。

そして、それは冷静にである。

このような姿で夜を過ごしていることなど故郷では想象もしていまい。敗け戦の戦場とはそんなものである。

ウト、ウトと軽い眠りに入る。

続く転進――すぐに夜は白む。十m余も離れたところに人影がニューッと立ち上がる。目をこすれは鉄帽は丸い。装具をつけ、銃を構えながら追尾する途中見失ってしまった。耳を澄ますと水の音がする。駆けよると巾七～八mの河があり、その中程を小銃を頭上に下腹までつかりながら渡河している小尾を発見した。渡り切った小尾に声をかけるとすぐ気付いてくれた。すぐに自分も後に続いた。岸辺で手を引っ張って上げてくれた。とても嬉しかった。

足跡をかくし、木組みの洗濯場とも思える渡河地点から稍々上流に歩き岸の斜面、潅木の中に並んで昨夜からの行動を話し合った。同じような道を辿ったこと。すぐ近くに寝て、やはり人の気配を感じていたこと。等々余りにもその一つひと

つが因縁めいて不思議に思えてならない。
うつらうつらしていると、小尾がすっくと立ち上り、下流へ少し歩いて木蔭に入り、大便を始めた。まだ腸をこわしている。陽射しがまぶしい。
その時、人声がして下流、渡河地点から、四人の住民が入水、水浴をはじめた。見つかったら騒ぐに決っている。手榴弾だけは揃えたが水浴を済ますと帰っていった。直後、小尾が派手な音をたてた。
「辛抱するのが辛かった」と言う。
胸ポケットの「ノート」は濡れては乾き、乾いては濡れる鉛筆の跡が滲む。
生米をかじりながら夜を待つ。日暮れて又歩く。どこをどう歩いたかもわからない。真暗闇の中で犬が低い声で「ウーッ」と唸る。平静を装いながら見えない犬を手で制すると見逃してくれた。
夜な夜な歩く中、月明りや、昼間ヤシ林の隙間から姿を見せるバナハオ山は想像を上回る雄大さで迫っている。近づいているのだ。足元が少しずつ爪先上りになっていることに気づく。
山裾に辿りついた頃は少々空が白みかけても歩き続け、そして夕暮れ前から歩いた。
二人だけのテンポは早い。夜明け頃、低いヤシの木に登って青い実を落とし、夜の冷気に冷えたヤシ水を心いくまで飲んで咽喉をうるおした。
ニンニクの効――バナハオ山麓、右方、瘤状の山の稜線をいく頃はゲリラの銃声もなく、ときに水牛で畑地を鋤く農夫の姿が見えるとこれを避けて歩くなど昼間も動いた。一カ月近い転進の疲れか、山麓についた安心感か、栄養不足かやたらに足が重い。
一軒のバハイの軒先に球根が並べて吊されている。ラッキョーかニンニクかわからなかったが皮をめくって一粒口に入れ噛むとその辛いこと。思わず吐き出して唾をのむと食道から胸にかけて熱いものが走る。ニンニクらしい。体のために良いと聞いていたので空の図嚢に五～六球頂戴した。
浅い沢の底を流れる水を飲み、味気ない生米をかじり、一粒のニンニクをゆっくり嚥下した。やはり酒の熱爛を飲んだような熱さがしみわたる。顔がほてってくるし、目がしらが楽になってくる。腰かけている足が温かくなったような気もする。小尾もそう言う。
又歩くと次のバハイの床下には、白、茶色の鶏が多数、声高に逃げ回るのを追っかけて漸く一羽を捕まえた。
夕方になって気がついた。上り坂の稜線を休みはしながらも二時間位走っている。これは明らかにニンニクの効と意見が一致した。「体力に役立つ」……と。
翌朝、高橋と遭遇、彼は一人でここまで辿りついたのだ。三人で愈々山麓に入る。夕方は涼しく、危機感からも脱し、その夜はバハイに上り込み、稍々高地のためか珍しく囲炉裏がきってあり、そこで火も燃やした。
前日捕まえた鶏を馴れぬ手付きで料理して刻んだニンニクをつけて火であぶりパクつけば格別の味、捨てるのは羽毛と糞だけ、トサカは勿論、脚、骨まで黒焦げにして食べた。トロ火の傍で一刻、ぐっすりと眠った。
友軍に合流――翌日も、目前に大きく迫るバナハオの山を目ざした。ふと、数百米先の稜線、樹林の手前を一列になって左方の谷間に下っていく小部隊を発見した。ここまで来て敵なのか、味方なのか……見え隠れに急ぎ、後を追った。百米位近づいた時、最後尾数人の鉄帽は丸いと見た。青草を踏んだ足跡をそのまま追尾し、谷に下り隣の稜線に出た。
その途端、「誰か！」返答する前に日本兵であることに安心感がつっぱしった。二人の歩哨は兵であった。自分は伍長、下士官である。慌てて敬礼を受けたが、全くもって面はゆい。
この部隊は、第十九大隊の基地部隊であった。そこから約一㎞近く上って樹林

に入り、大隊本部に到着、深い谷の所々には已に宿舎が建てられていた。

滝沢大隊長に申告「当面、当大隊に勤務するよう」下命された。第十九戦隊員十余名も基地大隊と行動を共にしていた。

約一か月にわたる敵地横断の間、ノートに書いた簡単な日記は五月二十五日となっていたが、正確にはその日は五月二十七日で、当日、海軍記念日であることを知らされた。

雨と汗に滲んだその小さなノートは意味もないまま、炊きつけなどのため、一枚々々と燃やしてしまった。

「バナハオ山」の日々

大隊基地は、大木の樹林の生い繁る谷間、高さ二～三十ｍもある滝のすぐ下に展開、石塊累々の中、平坦なところを選んでそれぞれ分隊が趣向をこらした茶室風の小屋を作り、床にアンペラを敷いて宿舎としていた。床は丸太作りのため、寝返りをする毎に凸凹をさけ、安定したところを背と尻が探らねばならない。

けれども、大きな岩の傍らにはドラム缶の風呂もある。炊さんもできる。歩哨についている戦友もある。しみじみと組織された部隊の有難さを感じ、転進の一夜一夜を想い出しながら住み心地はまずは良いところであった。

三日に半日位歩哨につく程度で、本格的な戦闘はなく、昼間、ゲリラ数十人が稜線づたいに迫り、攻撃をしかけてきたが、一斉射撃で撃退されたことが数回あった。その直後、必ずといっていいほど、迫撃砲が打ち込まれ、きれいな樹林の空気を硝煙で汚された。

或る夜、横に寝ていた小尾が人知れず衰弱死した。

物云わず、息ひきとった小尾は、最後まで静かな戦友であった。

同じ戦場でもまずは落着いた陣地内での葬儀、君が代、捧げ銃の礼式の中、大木の分れた根っ子に沿って、できるだけ深く、掘り下げた穴に埋葬した。

不思議な縁（えにし）のあった戦友の弔い。流石、胸にこみ上げるものをひしひしと感じた。

食糧確保――三日に一日は食糧調達のため、日暮れ前から稜線を下りていった。下りていく程、サツマ芋、木芋、籾等豊富であるが当然危険は伴う。

鶏は最高であるが、已に野性化しており、十ｍ余の高い木の上に宿る。小銃の照準が合わせられ、鶏には気付かれない夕刻の数分間は鶏射ちのチャンスである。

この時分、単発の銃声がするのは、ネライを定めてこの時を待っていた戦友の面々である。豚や猪は急所を外すと逃げ足は特に早い。三八式歩兵銃でも腹や尻に当った位では即座に効き目がない。何れ出血多量で死ぬことを思えば惜しいことこの上ない。

樹林の谷間には、春菊に似た香り高い野草が生い繁っていて、手折り、ゆでてあくを出しよく食べた。塩気のない「おしたし」など数回で鼻をつく。トカゲ、蛇、ネズミも食べた。カタツムリは、フランス料理の高級品だなど教えられた。いずれも初めは好んで食べたくはなかったが、稀少な動物性蛋白源である。

塩を徴発してきたときなど、その中にニンニク、トウガラシを細かく刻んで香辛料とし、少しでも長持ちさせる工夫もしたものである。

「藤兵団司令部」へ転属

バナハオ山頂越えて――六月下旬頃であったか、突然、戦隊特別幹部候補生に対して兵団司令部への転属命令が出た。指揮官は、第十九戦隊群長「勝俣」少尉であった。山麓を迂回せず、二千ｍ余のバナハオ山頂を越えることとなり、総勢約二十名、お世話になった第十九大隊に別れを告げ、急坂の密林を山頂へと向った。数メートル先も見えない濃霧に見舞われるとびっしょりと濡れて寒ささえ覚える。この山を目ざして彷徨した約一か月、時々姿を見せたバナハオ「青山元不動、白雲自去来」その白雲がこの霧であっ

た。

途中、友軍機の残骸があった。おそらく濃霧に方向を見失ったものか。夕暮れには山頂についた。山頂の眺めは絶景そのもの、山頂中央部火口は既に死火山で三方絶壁、自らの足元は全く見えない。深さは二百m以上もあったと思う。底は、赤土色の池となっており一方のみ下界へ向けて開けている。対岸やや左方には糸のような滝が一条、霧の晴れ間に遠望すれば、続くヤシ林の向ぅには湖や小さな町並みが見えるが、どこなのか全く見当がつかない。

頂上の平坦地で野営することになったが、霧がかかると、思わず「寒い！」の連発、燃えるものとて全くない。マッチの軸も残り少ない「銃の床尾板を……」の声も出たが、自分ははっきりと制止した。枯枝もずっぷりと濡れている。これを一人ひとりが細かく手折り、肌で乾かし、丁寧に積み重ね、その上に生木を細く刻んで乗せ、更に細枝を井桁に組んで点火、交代で「プー、プー」と吹いたが目まいがする程、お互いに体力が弱っていた。

中々燃えつかないで苦労している中、火種吹く池田が唇を真青にしながら震えだした。交代で頬を叩き、体中を摩擦して生気をよみがえらせたが、南国でこのような寒さは想いもしなかった。漸く火が燃え出すと生木の火力は強い。泡を出し乍らも音をたてて燃える。

山の頂上なるが故に煙の心配もせず、斥候も出さず、朝まで燃やしつづけながら、火の傍で重なるようにして暖をとった。

勝俣少尉は、夜明け前、進路捜索のため、一人で出発されたが、一隊が出発して約一kmも進むと、同少尉は上り坂でこちら向いてチョコンと座り、膝の上の飯盒の中に手を入れ、サツマイモを掴んだまま已に冷たくなっていた。真面目な人だったと聞く。家族の写真を胸に入れていたが、父君であろう威厳のある一枚を憶えている。樹林の落葉を分けて丁重に葬り再出発、山頂の凸凹道を半周して幾日前か人が通ったらしい下山への道を辿った。　兵団司令部の裏側へ出たのは夕刻前であったと思う。

藤兵団司令部到着――直ちに整列して、「上原」参謀長に申告、この人は体格も立派で、悠揚迫らざるものを感じさせる風格の人であった。申告が終るや、「今井侯補生！前へ出ろ、豊福小隊勤務を命ず」……「豊福が待っているぞ」第十四戦隊本部副官の豊福少尉が無事であることを知り、同時に自分の生存がどうしてわかっていたのか。不思議であった。

兵団司令部と第十九大隊との間には十分な連絡網が確保されていた等、全く知る由もなかった。

豊福小隊――兵二名を案内につけられ、司令部から約一km余り下って豊福小隊に着いた。

豊福少尉の元気な姿があり、そして同じ第十四戦隊第三中隊の未岡伍長（生還）伍長もいて懐かしく迎えられた。

その夜は、今まで辿ってきた戦斗の状況、弥次喜多道中などを話しながら、自分の父親位の隊長当番兵、「今野」一等兵がトロ火で炊いた味つきの水牛肉をご馳走になり舌づつみをうった。

土間の火種の上には飯盒がかかり「グツグツ」と更に肉が炊かれていた。

畳三枚程の小屋の板壁には、太ペンで、「勇怯の差は小なり、而れども責任観念の差は大なり」と記した短冊が貼りつけてあった。

当小隊は、兵団の食糧を確保することを任務とする又の名を「徴発隊」と称し、下士官、兵約三百名、三人一組で、毎日数組が、約一週間の予定で下界に下り、夜陰に乗じて水牛、芋、籾、バナナ等を徴発し、ときには、東海岸まで至り、ジャ

ングル内で鉄板を焼き海水を垂らして塩を作り帰隊すること等を任務としていた。

朝は点呼、徴発への出撃、一方、戦果の袋を背負い、数頭の水牛の口をとり、尻を叩きながら帰隊してくる兵、昼は鉄帽を仰向けにして籾を入れ、木の棒で米搗きをするなど、様々な生活の毎日は、規律も厳正で活気に溢れたものが感じられた。

敗戦を知る――食糧の確保は不十分ながらもまずは順調で闘志も十分であったが、一方戦局の方は、八月の中頃から下界でも銃声が全く聞かれないようになった。爆撃機、戦闘機の姿も見られず、時にＤＣ輸送機が山腹を往復するのみで戦局はひょっとするとわが方に有利に展開してきたのか……とも思った。末岡と芋掘りに出ての帰り道、低速のセスナ機が目の前にビラを撒いた。数百枚束になったままのもある。珍しくもない「デマ」と軽くあしらっていたが、紙数がまとまっており、尻拭きにでもなると思い持ち帰った。

「無条件降伏」と大きな活字が目に入ったが、勿論、全く信じてはいなかった。

九月の中頃、豊福小隊本部に上原参謀長が立寄り、山下奉文大将の命令文と感状を頂いてきたことが分かった。

ここで初めて「敗戦」の事実を知った。

然しながら、この布陣の下、敢えて最後の一兵となるまで戦闘を継続することになるのか、命令に従うのか、「生か死か」の命運を待つ一夜であったが、翌日「生存者は、帰還して祖国再建に尽すよう」さらに「軽挙、盲動を禁ずる……」旨の伝達が全軍に示達された。体中の力が一挙に抜けていくのを感じた。

今までの苦闘や、多くの戦友の死を思うとき、物言う力も湧かなかった。頬に涙が伝わった。しばらくは放心した状態であった。

然し諦めていた家族や故郷の山々に再会出来る嬉しさと、戦争に負けた悔しさとが錯綜して、複雑な心境であった。

武装解除　第一梯団下山

軍使の旗手として――九月二十五日、我々は南部ルソン最後の拠点バナハオ山を三梯団に分け、三日がかりで下山することになった。第一梯団軍使は豊福中尉、「軍使の白旗は今井軍曹が持て！」軍使とはいえ、武装解除を受けるための白旗など名誉なものでもない。第一陣約六百名の先頭に立つこととなった。密林の山麓を抜ける手前に部隊を残し、軍使と通訳、兵数人と進んだところ、芝生の広場が開け、真ん中に巾三十㎝程の道が一本、向う側には三～四十名の米軍が横一列に、そして水冷式重機関銃が二丁、こちらに向けられている。

飾る最後でもないけれど、堂々と歩いた。米軍も縦一列になって歩み寄り、中央付近で停止、自分は一歩左へそして右を向いて佇立した。昼間、間近に初めて見る米鬼である。

豊福少尉は通訳を通じて

「本日、第一梯団として約六百名、明日、明後日夫々約六百名武装を解除させる。国際法に従って適切に処遇されたい。」

相手の「ＯＫ！」だけは自分にもよく解った。

想えば、ルソン決戦を企画する呼号の下、我々海上挺進第十四戦隊は、南部ルソン、バタンガス湾に集結、布陣、洋上肉薄の機を窺うも米軍大艦船は湾口遥か北西に航行、主力の精鋭はわが後方に空挺部隊を降下させ、戦車部隊を含めて背面を脅やかすに至り、ついに特攻艇㋺を海中処分し、直ちに陸上斬込隊としての陸戦に移ったのであった。

戦闘、斬込み、転進につぐ転進、バナハオ山での布陣、抵抗の中でこのような敗戦を迎えたとき、わが第十四戦隊は、百四名中、戦隊長以下八十三名は再び還らざる……。

武装解除を受ける兵器は、銃は槓杆を引いたまま、弾薬、刀と区分して無雑作に積み重ねていく。

古ぼけて汗と虱（しらみ）に汚れた衣服の丸腰にされた。日本軍人として初めての屈辱であったろうにこの進行は手順よく案外、あっ気なく終ってしまった。

かくして第一陣の引渡しは済んだ。戦友達はトラックに詰めこまれ、荷台の前方に米兵が銃を構えて警備しながら、どこへ運ばれるのか解らないままに砂塵を上げて出発していった。

再びバナハオ山へ――豊福少尉と私は後に残り、第一陣が出発した後、米軍将校や兵数名と車座になり、足をなげ出しながら通訳をつうじて談話した。

同じ年頃の米兵が「何歳か？」と聞いているらしい。この程度の英語なら何も通訳が出しゃばらなくても判る。「十八歳、軍曹！」と余計なことまで答えて胸を張ったら、米兵の驚いた仕草が理解できた。

米軍のレイションを呉れたが、これが実にうまい。牛肉と白大豆を炊いた缶詰である。煙草の香りも実に甘い。再び山に帰るに際し、背嚢一杯レイションを詰めてくれた。

隊長と通訳と三人、そこに米兵が拳銃一丁を腰にぶらさげたままでついてくる、再びバナハオ山を目ざす。

昨日までの敵とはいえ、人なつっこい兵だ。途中休憩した時、自動式けん銃を手渡して見せたり、胸ポケットから写真をとり出し、「私の恋人で、今ハイスクール」人形のような顔した赤毛の美人だった。「今年のクリスマスまでには本国に帰りたい」といっているそうな。写真をしまいこむとき「チュッ」あどけなく目を細める姿はほほえましいとは思うけれども、隔たりは余りにも大きくすぐに理解はできない。思わず、「こんな連中にどうして敗けたのだろうか……」すかさず隊長は「国情の差なんだ、この国ではこれが普通のことなんだ」。

隊に帰りつき、レイションを「末岡」や「今野」に分け、自らも又食べた。

「こんなもん食って戦争していたのか」、やはり「うまい」という。

翌日、再び第二陣の先頭に立ち、前日同様武装解除を受ける一人となってしまった。とき、二十年九月二十六日であった。

第一五戦隊及び基地第一五大隊戦闘経過

元隊員　中溝　二郎

海上挺進第一五戦隊は、暁第一九七五四部隊と称し、昭和十九年九月一日から幸ノ浦基地で訓練を始めていたが、十月五日に正式に編成となった。

戦隊長は、陸士五三期の小串脩大尉で、第一中隊長は、鈴木直興中尉、第二中隊長は上野義現中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長は今井甲子雄少尉（陸士五七期）、副官は篠崎圭二見習士官（幹候一〇期　二〇年一月少尉）、群長は豊浜の船舶幹候隊出身一一期の見習士官、隊員は特幹の一期生（十九年十一月伍長）であった。

十月十五日に、まず第三中隊は赤峯丸・加古川丸・神祥丸に分乗して宇品を先発し、基隆から高雄を経て北サンフェルナンドに、そして十一月十日にマニラに到着、舟艇を疎開するため各船より舟艇を泛水して平安丸に積載し、隊員も移乗して十二日の夜半マニラ港を離れ、バターン半島のカブカーペン泊地に停泊、積載していた㋺舟艇の泛水作業を開始直後、米軍機による銃爆撃を受け平安丸は火災を起こして沈没、隊員の負傷者は一名であったが、積載していた㋺（三十隻）が失われた。（この船には他に第一四戦隊・第一七戦隊の㋺も一部積載されていた）

隊員はカブカーベンに泳ぎ着きここよりマニラに渡り本隊の到着を待った。

本隊主力は、十月三十日赤城山丸に乗船し、二一隻の船団で出航、海上の被害はなく、十二月一日マニラに到着し、以後マニラ市の旧南方総軍司令部の所在した付近に駐屯していた。

十二月十一日から二十日にかけてマニ

ラ市を発ち、ルソン島西南部パカパス湾に面するサンチャゴ海岸のセントラル部落に基地を展開して、漁撈第一五大隊と称していた。

昭和二十年に入り、挺進基地隊長の堤中佐の命令により、一月五日に第二中隊長上野中尉以下二十一名が、米軍の上陸に備えて挺進第一一九大隊（基地第一九大隊）の所在地であるナスグブ海岸のタリン湾に、舟艇とともに分遣となった。

一月下旬、北上してきた米軍船団は、一月三十日にナスグブ沖に接近し、上陸する態勢を見せたため、その夜に一九大隊の泛水作業によりタリン湾から発進した第二中隊が、舟艇攻撃を敢行し、三十一日に米軍泊地に突入した。

この出撃について、ナスグブ南方の高地での見張りの第一九大隊基地隊員は、海上の火柱数本を望見したと報告しており、米軍の発表によれば、同夜の特攻艇の攻撃により、駆潜艇一隻（ＰＣ－一一二九）が沈没し、又、米魚雷艇二隻が特攻艇と誤認されて味方の駆逐艦によって撃沈されたとしている。

なおこの出撃については、二月になって、挺進隊とこれに協力したとして藤兵団に対し、振武集団長横山中将から感状が授与された。

また、この日サンチャゴにあった主力の内、一部隊員（第三中隊）は出撃の準備をしたが取りやめとなった。

出撃者中上野中尉ら四名は、この後ルバン島に向け進航して同島に到着し、後に同島に渡ってきた第一六戦隊員と、この場所が敵船団攻撃には好条件と考えて、同島の情報隊の無電で呼び寄せた一五戦隊の舟艇二隻（前田見習士官以下四名）と共にいたが、三月上旬から下旬にかけ、上陸してきた米軍との戦闘で殆どが戦死した（一五戦隊の生還者は一名）。

次いで二月二日、第一中隊の浜尾見習士官以下六名（三艇）が、サンチャゴから同じくナスグブ沖に出撃したが、米軍船団を発見するに至らず、攻撃は行なわれなかった。

二月四日にも第三中隊の佐々木見習士官以下九名（四艇）が出撃したが会敵せず引き返した。

更に二月十日（十一日、十三日、十四日の説がある）戦隊の残員の全員で、残り舟艇全部で出撃したが、これも確認しうる戦果はなく、一部の隊員は舟艇がリーフ（珊瑚礁）に座礁して身動きがとれなくなったり、又、帰還途中の海上で米軍のＰ38の編隊に発見されたりして、いずれも艇を自沈して陸上から基地に帰還した。この出撃の際、戦隊長は篠崎少尉他一名とともに舟艇で自爆したといわれ、又約十名が未帰還となっている。

別資料によれば、「二月十四日未明三時三十分ナスグブ埠頭に係留していた米陸軍の貨物船ＦＳ３０９は、特攻艇一隻に急襲された。艇には三人も乗っていた。

突入しかけたとき、艇はイカダに衝突大爆発をおこした。ＦＳ３０９は大量の水と砂をかぶったが、死傷者は出なかった。」

（日本特攻艇戦史…木俣　滋郎…M,F,Willough by The U,S,Coast Guard in World War　Ⅱ）

生還者の報告によれば小串戦隊長は埠頭に係留されていた輸送船に突入したと云われているが、右記の事項と一致していると思われる。

第一回からこの出撃までの間に二十八（三十二）名が海上戦死した。

（ただし、これらの戦死者は、出撃命令の系統が必ずしも明確でなかったためか、方面軍司令部の確認はされず、従って特攻戦死扱いにはされていない。）

基地に残存した戦隊員は、二月十九日に基地大隊長中島大尉の指揮下に入り、堤中佐の二月二十日付の命令に基づいて、二十五日にカラカ市に転進し、更に三月上旬にタール湖南岸地区のクエンカに移動命令を受け、五日にクエンカに着いた。

ここで藤兵団（第一七聯隊）の市村隊

（第二大隊）の指揮下に配置され、第一六戦隊の残員と合流してマコロド山麓に陣地を構築し、その地区周辺で斬込戦闘等を展開していた。

ナスグブに上陸した米軍は、バラヤン湾を経由してバタンガスに達し、北上してリパに達する幹線道路を確保する目的で、アリタグタグ、クエンカ、デイタを目指して進行してきた。

戦隊員の大部分は三月一日より第一五戦隊第二中隊長の鈴木中尉に率いられ、第一六戦隊員と共にアリタグタグよりクエンカにいたる道路の守備につき、三月四日から戦闘に入り、その後、クエンカに撤退してからも連日激戦は続き多数の死傷者が出た、以後市村大隊の本部と共にマコロド山に転進し、ここで第六戦隊群長の西野少尉の指揮の下に、斬込等の戦闘を続けながら自活していたが、この地域全体の戦闘で合計約五十名が戦死した。残員（五名）は、二十年九月に至ってここで終戦を迎えた。

又、他の残員は基地大隊の一部（第一中隊）と共にバツラオ山に拠っていた歩兵第三一聯隊第三大隊の指揮下に入り、タガイタイ高原の稜線の下、タール湖北岸を迂回してマルプニヨ山の藤兵団本部に達した。その後米軍・ゲリラと交戦を続けながらバナハオ山付近に移動し、日比野支隊長（第六戦隊長）の指揮下に入り、自活自戦の態勢をとっていたが、二十年九月ここで終戦を迎えた。

こうした戦闘により、戦隊の被害は将校十四名、隊員七十八名、下士官一名の合計九十三名の戦死者を出した。

海上挺進基地第一五大隊は、少尉候補者一九期の中島源七大尉を大隊長に、中隊長には風間不二夫、大堀常三、和久井恂二、小杉芳次各中尉らがあり、昭和十九年九月十九日新潟県新発田市の歩兵第一六連隊補充隊東部二三部隊で編成を行ない、暁第三三二九部隊と略称したが、比島到着後は基地第一一五大隊と称していた。

十月十五日、本部、第一、第二、第三の各中隊の主力は、大彰丸及びパシフィック丸に乗船して宇品を出発し、整備中隊の一部は第二梯団として十月十六日に戦隊の一部とともに赤峯丸、神祥丸、加古川丸に分乗し又、他の者は第三梯団として戦隊主力と共に赤城山丸に乗船して十月三十日に出航した。

十月二十六日、大彰丸はバシー海峡で米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、乗員は辛うじてパシフィック丸に救助されたが、パシフィック丸も十月三十一日バターン半島沖で同じく魚雷攻撃を受けて沈没し、このため総員の約四割（副官藤田善弥中尉以下三八〇名海没）を失い、四六〇名だけが十一月一日にマニラに着いた。

マニラ上陸後は、第二海上挺進基地本部の堤中佐の指揮下に入った。

後発となった整備中隊の一部は、戦隊の主力とともに、十月二十七日赤城山丸に乗船して宇品を出航し、十二月一日になってようやくマニラに到着上陸した。

また十一月十三日、第二梯団となった整備中隊の一部は、舟艇秘匿のため平安丸に転乗し、マニラ湾を出航して航行中、コレヒドール島付近で米軍機の爆撃を受け平安丸は沈没した。

大隊本部は、十一月一日からマニラにいて、設営の準備と同市防衛のための作戦行動に従事していたが、十二月十一日から同月の二十日にかけて、逐次基地設定のためバタンガス州カラタガン地区に移動を行ない、頭初は同地で陸上戦闘用の陣地構築等を行なったが、更に十二月二十一日にカラタガンからサンチャゴ近くのセントラルに移動し、ここで改めて舟艇基地の設営を行なった。

二十年二月一日から十四日の間に第一五戦隊長小串大尉の指揮する戦隊がナスグブに出撃、戦隊長が出撃戦死したため、残った戦隊員を基地大隊長の指揮下に入れたが、この間にナスグブから上陸した

米軍は迫って居り、大隊の隊員にも戦死者を出した。

二月二十日、基地本部隊長の堤中佐の命令に基づき、サンチャゴから撤退して、挺進基地任務から陸上戦闘に入ることになった。

同日に大隊中の第二中隊は、第一九大隊長（滝沢大尉）の指揮下に移った。

本部、第三中隊及び整備中隊は、歩兵三一連隊高橋大隊（第三大隊、これは同じ第八師団であるが、特に南部防衛のため藤兵団に属され、一時バツラオ山にいた）に、糧秣補給要員として使用され、二月十九日バタンガス州カラカに向って出発し、二十二日にカラカに到着した。

この後、整備中隊のみ、カラカに在って高橋大隊の糧秣補給に従事することとなり、大隊主力は藤兵団の市村大隊（一七連隊の第二大隊）に転属命令が出された。

大隊主力は二月二十四日にカラカを出発して、二十六日にバタンガス州クエンカに到着、同時に基地第一九大隊に配属中であった第二中隊も、本隊に復帰することとなり、大隊長の指揮下に入った。

三月七日以降、クエンカ付近で米軍との本格的な戦闘に入ったため、人員の損害は多く、二十七日に至って大隊長は生存者三十余名をもってデイタの米軍陣地に斬込みを行なったが、この戦闘で二十八日には大隊長も戦死した。

爾後大隊の指揮は第一五戦隊鈴木中尉が代行して依然戦闘を続行。

四月十九日に至って、デイタの日本軍陣地は、米軍の攻撃により崩壊したため、残員は一部はマコロド山北面に向って撤退し、更にその一部は二十七日にバツラオ山に向い、以後同地区を中心にタガイタイ、バツラオ地区で遊撃戦を展開していた。

尚、第一中隊（中隊長代理本田清太郎中尉・第一中隊長海没）は二月二十三日以降、セントラル陣地（三宝山）に於いて糧秣確保と患者援護に従事中、バタンガス州バラヤン附近より猛攻をうけ、これと交戦、死者続出したが、三月下旬、マルプニヨ山に転進、爾後兵団直轄部隊として戦闘、特に四月二十八、二十九、三十日の戦闘に置いて中隊長以下戦死者多数と云われている。

同隊の戦死者は、総員九〇三名中八四八名で、生還者は五十五名とされている。（ただしこの数は必ずしも正確ではない。）

海上挺進第十五戦隊戦闘行動概要

元第十五戦隊　松田　兌助

海上挺進第十五戦隊は昭和十九年十月五日正式に編成となりました。副官は篠崎圭二見習士官（群馬）幹候十期で本部小隊長及び各中隊の小隊長は幹候一一期の見習士官十名で将校は計一五名でした。隊員は曹長、軍曹各一名（本部付）特幹一期生八七名で総計一〇四名でした。

兵器は本部及び各中隊に一〇〇式の機関短銃が一挺配備されました。私達特幹生には四十年式軍刀と二十六年式拳銃が渡されました。

私は第三中隊に編入されました。第三中隊長今井甲子雄少尉（陸士五七期）、第一小隊長佐々木泰三、第二小隊長今田恭則、第三小隊長新井勲（いずれも幹候十一期見習士官）で隊員は中隊直轄隊員三名（一名中隊長艇操縦）各小隊は隊員八名で二十七名全員特幹一期生でした。計中隊長以下三十一名でした。

編成が終わり出陣式のあと広場で戦隊全員揃っての軍装検査がありました。その時に戦隊長を中心としての記念撮影を致しました。その時の写真は私達の中隊は先発だったためにマニラで受領しましたが亡失となり残念です。

第三中隊は先発となり昭和一九年十月十六日に幸の浦を離れて宇品で船舶隊の大型の特殊船に乗船して出港し、門司港で三隻の輸送船に分乗となりました。中隊長及び直轄隊員三名、第一小隊長以下九名、基地第十五大隊の友野曹長一名の

計十四名は赤峯丸（中型輸送船）に、第二小隊長以下九名は加古川丸（中型戦標戦）に、第三小隊長以下九名は整備中隊の古茶少尉以下若干名と共に神祥丸（小型快速船）に乗船となりました。各自の㋹舟艇はそれぞれの輸送船に搭載しました。やがて十三隻の船団で門司港出航となりました。

済州島沖を廻り上海沖、中国大陸沿岸を接岸航行のコースを通り台湾の基隆に寄港して高雄港に到着、港外に碇泊となりました。門司港出航早々に済州島沖で敵潜の雷撃を受けて一隻が沈没（御影丸）しました。

高雄では台湾沖航空戦の直後故に戦場という緊迫感をひしひしと感じました。新たに七～八隻にて比島向け船団を編成されました。

昭和十九年十一月一日の夕刻高雄港を出港しました。魔のバシー海峡突入でした。第一夜は無事に明けました。低気圧の接近だったでしょうか波が高かったようでした。第二日の夜半に敵潜の魚雷攻撃があり、二隻の輸送船が沈没しました。アトラス丸とハンブルグ丸と聞いております。ハンブルグ丸には第六戦隊の主力と第九戦隊の一部が乗船していたようです。闇に響く爆雷の轟音振動、恐怖とも戦慄ともなんとも言いようのない状況でした。船団は島影に待避となり十一月三日の朝を迎えました。バタン諸島のサブタン島の入り江でした。

十一月三日の明治節の遙拝式を赤峯丸の船上で挙行しました。やがて島を出てルソン島西海岸を接岸航行で南進してマニラ湾に入り十一月十一日の朝マニラ港に入港しました。

十一月八日の午前でしたが目前で護衛艦（海防艦？）が突然火柱と轟音を残してスーと海中に姿を消しました。

マニラ港では多くの艦艇船舶が港内外の各所に残骸をさらしており痛ましい限りでした。

主として九月中旬のマニラ大空襲の被害と聞きました。また十月二十日に米軍はレイテ島に上陸戦闘拡大中であり、厳しい戦局の最中でした。十一月十二日に各船でそれぞれ舟艇を泛水し輸送船平安丸に移乗して久方ぶりに中隊全員が揃い無事再会を悦びました。バターン半島のカブカーベン泊地に㋹を疎開するとの事でした。※泛水（はんすい水に浮べる事）

平安丸には第十四戦隊、第十七戦隊の一部が㋹と共に乗船しておりました。十二日の夜半にマニラ港を離れて十一月十三日の早朝にバターン半島カブカーベン泊地に碇泊しました。泊地の水深の関係か、岸から三百ｍ位離れた地点に投錨しました。

八時頃でしたでしょうか㋹を一、二隻泛水して間もなくだったと思います。洋上マニラ空襲に向かう艦上機の編隊が陸続と進攻してゆくのが望見されました。

突然マニラ方向より反転してきた三、四機のグラマン攻撃機の爆撃を受けました。乗船の船砲隊の反撃の暇もなく機関部と三、四番ハッチ付近と思われる箇所に爆弾が命中して火災発生浸水して退船命令が発令されました。

全員海に待避し、救命胴衣や浮遊物を利用して海岸に泳ぎ着きました。救助に当たった所在の船砲隊のお世話になりニッパハウスの宿舎に入りました。

作業中でもあり装具等は殆ど㋹に積載しておりました。被爆から退船までの時間が短く持ち出す余裕が無くて着の身着のままいわゆる丸腰となっての上陸となりました。

人員の損害は今田小隊長が腕に機銃掃射により銃創を負い、マニラの病院に入院となりました。負傷者は一名でしたが㋹三十隻と兵器装備の殆どを失いました。

機関室より後部にいた他戦隊では負傷者の他に若干名の戦死者がありました。

カブカーベンでは四、五日の滞在だったでしょうか、やがて夜間同地を離れて舟でマニラ港に入り上陸後兵站宿舎に入

りました。宿舎は旧南方総軍司令部の所在した建物の付近でした。宿舎には比島到着前に雷撃をうけて海没の被害を受けた基地第十五大隊が宿泊しておりました。

連日のように空襲があり日中は安全地帯の在留邦人の住宅や堅固な建物の議事堂等の階下に疎開して夕方には宿舎に帰る状態でした。この間に服装等の支給を受けましたが何ともみすぼらしい有様でした。

恵まれぬ環境でしたが中隊長を中心に一致団結して本隊の到着を待ちました。

本隊主力は昭和十九年十月三十日に赤城山丸に乗船して二十一隻の船団で出港、被害無く十二月一日に無事マニラに到着しました。私達の宿泊していた兵站宿舎に入り戦隊全員が揃いました。㋹はパシッグ河の河口の新築港に繋留しました。第三中隊は㋹全艇をカブカーベン泊地で喪失したために本部、第一、二中隊の㋹七十隻の再配分が実施されました。各隊に約二十隻の配分となりました。従って各中隊は三分の一が二人乗艇の体制となりました。㋹受領により連日宿舎より新築港へ舟艇監視、整備保守の勤務につきました。

途中漢字の看板をかかげる中国人街を通りましたがその逞しい生活力の姿が思い出されます。当時のマニラ市は米軍のルソン島上陸を前にして連日飛行場、港湾施設、停泊中の艦船に対する空爆が続いておりました。

やがてサンチャゴに移動が開始されました。十二月十一日から二十日にかけて戦隊は新築港でトラックに㋹を搭載し、各人が同乗して夜間輸送で、所定の展開地ルソン島の西南部バラヤン湾の一角パガパス湾西岸の漁港サンチャゴ海岸に到着して、基地隊員の手で㋹を下ろしました。

基地隊員の誘導により海岸に流入するサンチャゴ川を遡航して㋹を繋留しました。繋留地帯は、サンチャゴ川の湿地帯の右岸で鬱蒼たるジャングルを利用して㋹を充分遮蔽できました。

繋留後に戦隊は付近のセントラル部落に駐留となりました。サンチャゴ部落は小さな漁村でした。サンチャゴ川は河口は二十ｍ位の川幅でしたが、㋹繋留付近は五ｍ位の川幅でした。

戦隊全員が入居した建物は二階建ての立派な大きな建物でした。拓殖会社の建物とか聞いておりました。付近には給水塔がありました。部隊の衛兵所があり基地隊の兵が立哨しておりました。大隊本部、医務室等がありました。各中隊は大隊本部を中心に海岸等の部落に散開しておりました。十二月十五日に米軍のミンドロ島上陸が報ぜられました。米軍のルソン島上陸を前にして厳しい状況でした。戦隊は舟艇の整備、攻撃態勢等の訓練に多忙の毎日でした。基地大隊は爆雷の装着、燃料の補給、基地の整備、陣地構築等突貫工事の毎日のようでした。㋹は爆雷の装着、燃料の補給整備が行われて出動態勢に入っておりました。十一月十三日にカブカーベン基地で負傷して入院して居られた今田第二小隊長は傷も治り退院されて中隊に復帰されました。戦隊移動展開時にマニラの兵站病院に入院中の茂住伍長を残してきた事は本当に残念でした。

昭和十九年の暮れは、比較的おだやかな日が多くて海空からの偵察もありませんでした。基地大隊海没、第三中隊海没の状態で、資材機材等不足で不自由の毎日でしたが南十字星を仰ぎ元気で昭和二十年の正月を迎えました。

他中隊の戦況（事務局）

松田君の資料では彼の所属していなかった第二中隊の消息が分かりませんので、他の資料から得られた同中隊の動向をここに挿入補完させていただきます。

第十五戦隊第二中隊はサンチャゴの北タリン湾に分遣されていた。

このタリン湾の北方にナスグブの町があり此処の海岸は砂浜が続き、しかも後

方の山地までの間には、相当に広い平野が開けているので、バタンガス西部地区に兵員や資材を揚陸するとすれば此処の他はないといえる地形である。

ナスグブ町から十km程南にあるタリン湾は湾内にもリーフ（珊瑚礁）が多く、良港とは言えないが、南から嘴のように岬がでて南シナ海の波を防いでいる。

このタリン湾には、第十九戦隊が配置される予定で基地隊が基地作業にかかっていた。だが十九戦隊は海没により舟艇人員ともなくなり、配置は不可能になった。

基地本部長の堤中佐は、このナスグブ海岸へのアメリカ軍の上陸を予想し、最も近くにいる第十五戦隊に対して、一部をこのタリン湾に回すよう命令し、第二中隊の上野中尉をはじめ三十一名が、舟艇二十隻をもって此処に分遣されていた。

二十年一月三十一日、米第八十八滑空歩兵隊を主力とする千五百名が、ナスグブ海岸に上陸した。

この夜上野中尉の率いる第二中隊が出撃した。

この時の攻撃は、アメリカ側の資料によれば“一月三十一日、ナスグブ海域において駆潜梯ＰＣ－１１２９が特攻艇の攻撃により沈没”と記録されている。

船団を攻撃のあと、海没をまぬかれた上野中尉はじめ八名は、西に向かって艇を走らせ、ルバング島の海岸に着いている。

（ルバング島における上野中尉一行の行動は第十六戦隊関係の手記　ルバン島の戦い”中に述べられている。）

上野中尉の分遣中隊に続き、第十五戦隊では、サンチャゴの基地から数回ナスグブ沖に出撃した。この半島の海岸はリーフ（珊瑚礁）が多くこれに乗り上げたり、又は激しい風浪で舵を取られて漂流する艇も出た。

アメリカの船団の方は、リンガエンとナスグブの経験から、夜間は、陸岸からかなり沖に待避するようになったので、出撃しても効果を挙げるのは困難であった。

このために、その効果は不明で、死没した隊員の最後の情況も判っていないが、生還者の伝えるところによれば、二月二日、十日（四日？）、十四日と三回にわたって出撃したのである。

以下松田君の文章に続く

第一回として第一中隊の第二小隊が出撃しました。二月一日と記録にあります。

続いて二月四日に第三中隊第一小隊に“ナスグブ沖に数隻の輸送船あり”と言う情報に基づき攻撃命令が発せられました。第一小隊は㋙六隻でしたが当日の可動艇は四隻でした。

三隻が二名搭乗一隻が三名搭乗でした。一番艇は佐々木小隊長・西谷伍長二番艇は星加・田川・大野伍長の三名が搭乗で、三番艇は山田（忠）・伊藤伍長、四番艇は松田・大賀伍長が同乗でした。

夜闇にまぎれてサンチャゴ川を下りパガパス湾へと行動を開始しました。二番艇はエンジン不調で出発が遅れました。小隊長艇は海上に出たようでした。私は山田・伊藤艇の後方を二五米くらい離れて続行しました。川口に達したときでした。突然に山田・伊藤艇の搭載爆雷が爆発し大音響と共に飛散してしまいました。付近一帯水面はガソリンに引火して火の海でした。一瞬敵魚雷艇の待ち伏せによる砲撃かと思いました。幸い私も（操縦松田）大賀君も無事で舟艇も無疵でした。舟艇を河口の右岸の砂地に添って停止、点検しました。幸いエンジンは異状なしでした。

間もなく小隊長艇が沖合から引き返してきて状況を察知しました。小隊長は「山田、伊藤の弔い合戦だ、我に続け」と号令し先行しました。

星加（操縦）田川・大野（同乗）艇はエンジン不調のため調整に時間を費して大分おくれて続行となったようです。洋

上に出て小隊長艇追従となりましたが暗夜の上に前艇のスピードが速く遂に見失ってしまいました。サンチャゴ岬を廻り接岸航行中に突然前方に敵魚雷艇を発見しました。大賀君と合図を交わし全力で突入しました。魚雷艇の側面直前でⓁはリーフ（珊瑚礁）に触れガタガタ振動して停止してしまいました。直ちに敵の魚雷艇の機銃攻撃を予想して自爆の覚悟でしたが、一発の射撃もなくて不思議に思いました。よく見るとそれはリーフに座礁したために放棄したのでしょうか無人の艇でした。直ちに海中に入りガタガタと波に押し流される艇を押さえてエンジンを始動するも起動せず困っておりました。近くに呼ぶ声がありました。よく見ると小隊長艇でした。私達と同じく突っ込んだ事とわかります。やはりエンジン起動せず懸命の努力の中でした。バッテリーの関係もありあまり無理の起動もできずにかなりの時間が過ぎたようでした。思い切ってもう一度起動したところエンジンが掛かりました、万歳です。小隊長に「ひと足お先に」告げ大賀君と二人で艇をリーフから押し出してナスクブ泊地に向かいました。先に泊地攻撃に参加した第一中隊員から伝えられたリーフの予想以上の状態に驚いた次第でした。洋上に出て北上する頃には月明となり左側方にアンビル島前方ナスクブ湾左前方にフォーチュン島の小島が見えました。アガ方面は戦闘が続いていたのでしょうか、空が火災で赤く染まっておりました。

ナスクブ方面には全然船影もなくて大賀君と相談して反転しました。恥ずかしい話ですが会敵せずに生き延びたとなると帰路に猛烈に眠気が襲ってきた記憶が残っております。タリン岬付近で夜明けとなりました。上空に敵機が見え始めました。已む無く艇をサンチャゴ岬の灯台の付近に付け処分して陸路で海岸づたいに基地セントラルに還りました。遅れて出発した星加艇も魚雷艇に引っかかりエンジン掛からず艇を破棄して小隊長と共に陸路基地に帰ったと聞いております。

私の夜間サンチャゴ岬越えの出撃はもう一回あります。その時はもう敵が南下してきて已む無くの二月十四日戦隊長艇体当たりの日でした。その時私は中隊長直轄隊員の一人山田伍長の艇に同乗しました。中隊長艇の操縦者は猿渡伍長で三艇編成の右側が山田伍長左側が救仁郷伍長でした。

第三中隊残存艇全艇での出撃でした。接岸航行でナスクブを目指しました。三隻編隊の右側だったのでリーフに近い位置でした。リーフにひっかかってエンストとなりました。中隊長艇と救仁郷艇は私達の艇を残して北上して行きました。海に入り状況を見ましたところリーフにⓁが一隻沈んでおりました。その甲板を破りスクリューが食い込んでおりⓁの二段重ねの状態でした。如何ともし難く舟艇を処置し陸路基地に帰りました。座礁位置はタリサイ海岸だったと思います。

昭和二十年二月下旬

第十五・十六戦隊の残留者は中島基地大隊長の指揮下に入りサンチャゴ基地を撤退三宝山麓に移動する。（戦隊長はナスクブ攻撃時戦死。）

部隊主力はカラカに転進三月初旬クエンカに入り歩兵第十七連隊（藤兵団）の第二大隊（市村隊）に配属となる。

第十五戦隊の主力（本部、第一、第三中隊）はクエンカの戦闘で多くの戦死者を出し壊滅した。

三月初旬

松本・松田両伍長は基地隊の第一中隊に配属となり、隣接のサンペロ部落の海軍砲台の救援に赴く。砲台は艦載の十二㎝砲二門あり隊長は青山海軍少尉で、砲は海岸線の台上の陣地に位置していた。

砲台到着早々に戦闘が始まり、砲台は反撃の機も無く砲撃を受け壊滅する。

三月中旬

戦闘中にバツラオ山に在る歩兵第三十一連隊第三大隊に合流せよとの命により

戦闘を中止して患者隊を収容し転進を開始する。

厳しい困難を乗り越えてバツラオ山麓において第三十一連隊第三大隊に合することができた。

第三大隊長高橋利雄大尉。転進途中神戸伍長・浜尾見習士官倒れる

三月下旬

タガイタイ高原の稜線の下タール湖北岸を通り、マルプンヨ山の藤兵団陣地への転進となる。

三月二十七日の夜半国道を突破し、兵団陣地到着を計ったが意の如く進展せず、しかし三月二十八日の黎明にはマルバルに達することができた。しかし此処で待っていたのは三月二十七日にタナワンを突破した敵と同じくリパを突破して連携した米軍機械化部隊であった激しい戦闘が開始され、大隊長以下多くの将兵が戦死し、八重樫中隊長が大隊長の指揮をとり野戦飛行場を突っ切り丘陵の密林に脱出し残兵の集結となった。

四月初・中旬

三々五々集結した者は少数であった。マレプンヨ山西麓で戦闘中の部隊の、間隙を縫って藤兵団の翼下に入った。

第一中隊も別れ別れになったが幸い松本・松田は中隊長と共に八重樫隊長等と合流し兵団陣地に入ることができた。

ラクダ山の観測高地奪回の戦闘があり、中隊は椰子林の陣地に配置され戦闘に参加した。基地隊の本田中隊長は陣地偵察中戦死する。松本・松田両伍長は連絡下士官として大隊本部に常駐した。

四月下旬

リパ地区隊の小松山方面の陣地に移動し、ダラガ山の見える稜線の陣地に着いた。陣地に着く早々に松本伍長は砲撃を受け戦死する。中隊は長谷川軍曹が指揮をとる。小松山方面の戦闘は熾烈を極める。長谷川軍曹砲撃により負傷。リパ地区に夜間移動の時西谷伍長（三中隊）と出会い再会を喜び行動を共にしたが、体力を消耗した彼は急坂を登ることができず追従できなかった。彼もマレプンヨの陣地に倒れたものと思われる。米軍の攻撃は激しく玉砕を覚悟していたが敵の包囲を突破してバナハオ山に転進せよとの命令を受けた。

四月三十日夜半大隊とは別行動で稜線を後退、黎明となったためバナハオ山側の稜線下の地隙に遮蔽し休止した。しかし稜線の台上に米軍が侵入し発見され攻撃を受けてバラバラになり、分散の脱出となった。この時点で基地隊の第一中隊は壊滅したものと思われる。もっとも撤退前の一中隊の兵力は二十名前後であったと思う。

地隙に遮蔽休止前に牧野伍長（第一中隊）と出会い、再会を喜び行動を共にしたが、攻撃を受け脱出時に倒れたものと思う。その後彼の姿を見いだすことができなかった。

私がマルプンヨ山の兵団陣地で出会った特幹は第一中隊の牧野耕伍長と第三中隊の西谷正英伍長の二名でどうしてこの二人がマルプンヨ山の兵団陣地に来ていたのか思い出せず残念である。

五月初旬

幹線道路はことごとく敵の手中にあり、ゲリラの攻撃も激しく折から季節は雨期、険しい地形・夜間行動・飢餓、三々五々でマルプンヨ山を脱出したが、途中組んだり分かれたりゲリラに攻撃されたり、敵中突破は困難を極めたが最後に十三基地大隊の将校以下四・五名でどうにかバナハオ山に到着することができた。

椰子林の中を行動中に、クエンカの前哨戦で負傷しマレプンヨの野戦病院に入院し、殆ど傷も完治し行動中の大賀伍長（第三中隊）に出会い再会を喜び行動を共にしたが、途中混乱のため又分かれ分かれになっていたがバナハオ山で再会する。その後彼とは別れたり会ったり不思議の縁で結ばれており、戦後も親交中である。

五月中旬

バナハオ山にはクエンカから脱出転進してきた整備中隊の古茶少尉・熊谷曹長等や同じく第十五戦隊の新井少尉を中心に同じくクエンカより脱出転進してきた真柄曹長・内田軍曹・川上軍曹等やマレプンユ山よりの長谷川軍曹・市川衛生伍長・岡村伍長等が集まり総員約三十名、古茶少尉が指揮をとった。大賀伍長も到着しており松田・大賀伍長は新井少尉と起居を共にする。

藤兵団はバナハオ集結後は自活自戦の持久戦に入った。

我々の宿営地付近には八重樫第三十一連隊第三大隊・第十三基地大隊や第八十六飛行場大隊等が宿営しており、日比野参謀（第六戦隊長）の姿も見えた。

六月中旬

各隊は現状から推移すると食糧不足により自滅するよりは速やかに食料要域を確保し、自活自戦の持久戦のため転進を開始した。

我々の隊も古茶少尉の指揮の下東海岸（ラモン湾）に向かい転進を開始した。

六月下旬

マウバン街道のサンパロックの手前でゲリラと交戦となり、隊は古茶少尉組約十名と新井少尉組約二十名の二組に分かれる。新井少尉の組はマウバン街道を突破して東海岸に達し製塩等を実施して終戦を迎える。

古茶少尉の組は街道突破後丘陵の台上でゲリラに攻撃されて古茶少尉以下半数の五名が戦死した。泉田軍曹・松田伍長等は脱出することができ、後キャンプマヤビスに達し日比野少佐指揮の日比野支隊に収容され泉田軍曹は八重樫大隊に復帰した。

七・八・九初旬

支隊は前線に糧秣集積の基地を設け食糧を確保して持久戦に備え行動中であった。

新井少尉・大賀伍長が東海岸より連絡に来て日比野支隊長の指揮下に入った。

再会を喜び支隊本部で行動を共にしていたが間もなく終戦となった。

二十年九月下旬

キャンプマヤビスを撤収し、バタハン小学校で武装解除を受けサントドミンゴよりトラックに分乗カランバの捕虜収容所に入った。昭和二十年九月二十七日であった。

新井少尉は昭和二十年内に復員し、松田・大賀伍長はケソンの収容所で労働に従事したが途中で分かれ分かれになり、それぞれ昭和二十一年十月及び十一月に名古屋港に上陸復員した。

記録にみる陸軍航空特攻と通信２

大槻　健二

一　はじめに

前号の原稿において特攻における通信実施の事例を挙げたが、すべての特攻機に無線機が装備されていた様に誤解を受けかねない。その装備状況については不明な点が多いが、判明分のみ記すことにした。また、「お母さん」等の私的通信については例外ながら一件のみ具体的事例を見つけ出す事ができたので報告したい。

二、特攻機の無線機装備状況

機上無線機は用途により形式が分れ、「飛一号」から「飛三号」まであった。これらは機の航続距離に応じて電波の通達距離が異なるが、重量は九九双軽、九九襲撃、一式戦の説明書からは付属品を含めて概ね二四～二七キロとなる。

特攻機の装備は艦船攻撃のため、五〇〇kg爆弾×一、二五〇kg爆弾×一ないし二、などに加えて機種によっては増加タンク等を懸吊し、総じて過積載状態となるため速度低下を来し、軽快な戦闘行動を取ることはおろか離陸さえも危険が伴う。知覧飛行場で戦隊・特攻隊を見送ったなでしこ隊の女学生も、離別の悲しみ

より、離陸できるかの心配が先に立つほどであったという。（福島の高橋圭子会員の聞き取りによる。）そのため、重量軽減を目的として不要となる備品は外されることとなった。八紘第一一隊勤皇隊を鉾田で取材した中野実の記事（『文芸春秋』昭二〇・二）にはこのような記述も見られる。

「攻撃の際、装備で取り去るべきもの。」と黒板に向つた。私は、ギクリと胸に来た。隊長の文字を凝視した。

一、防弾鋼板
一、無線
一、酸素
一、同乗者銃架

「これだけとれ。つまり、これだけマイナスになる。そして、その代りに〇〇〇kg弾を積む。これがプラスだ。差引、プラス、マイナス、ほゞ同じだ。」

無線機は、隊長機（隊長及び小隊長…一二機編成なら三機）が装備されたという。しかし、実際の装備状況は時期や隊によってばらつきがあったようである。ここからは、無線機の装備状況に関する記述を抜粋していく。

①菅原六航軍司令官手記

前号に重複して引用するが、菅原司令官は装備状況に関して「各振武隊の隊長機に無電機を備え付け、簡単な信号を定めて戦場到着、攻撃開始を報告させる（隊長機事故あれば無報となる）。」と回想している。

②水戸航空通信師団　通信整備員回想

（水戸から知覧へ派遣され、特攻機の無線機の調整、整備に当たっていた人物、曹長）

「特攻機の無線機は当初は全機に搭載されていたが、ほとんど受信されることがなかったので、一時全て取り外したが、その後隊長機のみに取り付けられた。」（『陸士五七期航空誌　総合編』）

②知覧飛行場での整備兵の回想

私は昭和二〇年の三月下旬、鹿児島県の知覧基地で開聞岳の雄姿を見乍ら、日夜連続勤務でクタクタになって特攻機の無線機の調整に苦労して居た。重量軽減の為に無線機の内、受信機を取りはずす作業が主体であったが、当時の戦斗機乗りの方々はまだ無線機に余り関心がなかったのか、作業者が不足だったのか送信機共、調整不良で完全に作動するものは少なかった。只、四月下旬に二式複戦（屠龍）で編成された士官学校出身者の六機の特攻グループ（隊名は失念した）に受信機が作動しない事から取りはずしたことが判明し、こっぴどく怒鳴られた。お互いに飛行中交信を楽しみながら飛んで居たとの事であったが、時としては珍しい話しであった。それ迄何十機となく受信機をはずした特攻機で飛び立ち、送信機のみの一方通行で自分の所在も確認出来ぬまま、沖縄に飛んで行った方々を想うと、若干後ろめたさを感じて居た頃でもあり、又、再三兵舎の前に山と積まれた儘放置された受信機を見て、それ以後は送受機共完全に調整したものをつけて出発させた。

（『翔飛』二二号より）

（「六機の特攻グループ」は、時期から第二四振武隊と思われるが、「それ以後は送受機共完全に調整したものをつけて出発させた」のは二〇年四月後半だろうか。現場の判断なのか、上級部隊の方針なのかは不明である。新規に設置・調整する時間的余裕は無いと想像されるが、進発飛行場へ前進する前に外して来た部隊はそのままであったと考えられる。）

③第四三三振武隊（二式単高練）青木少尉手記

（昭二〇・四、特攻編成直後の回想）

…このあと一行は、熊本の菊池飛行場へ飛んだ。爆撃投下機をつけるためである。

（中略）通信機は受信機がはずされた。特攻機には、受信機は不要なのである。

（『特攻基地』より）

④飛行第一九戦隊（三式戦闘機）前田少尉手記

（1）二五〇キロ爆弾を二発懸吊することになった。然し二五〇キロ二発積んだら、離陸浮揚できない。そこで、三式戦の機体の中の重いものを外すことになった…最後に外したのが無線機である。無線機を外した意味は重大である。特攻機から何も打電できないばかりではない。特攻機の目的そのものの戦略的意義を問われる大きな問題であった。

（2）そこにあるのは、機関砲の無い、後方から身を守る防弾鋼板もなく、通信設備が撤去された、戦闘機の形をした、エンジン付き爆弾があるだけである。

（『落花の風』より）

（台湾第八飛行師団では、「誠第〇〇飛行隊」という名称を冠した中央編成の特攻隊の他、師団命令により現地部隊編成の特攻隊が多数出撃している。）

以上、無線機の装備状況について紹介した。記録が少なく不明確な事項が多いため、今後も事例を探していくことにする。

三、『オトウサン、オカアサンサヨウナラ』湯村泰伍長の通信実施事例

このような、「異例中の異例」の通信事例に驚かれる方もおられると思う。確かに、「いつ」「誰が」という説明がなければ信じがたいし、筆者としても第三者がそれが一般的であったかのように主張するならば否定的に見ざるを得ない。ところが、実際にその電文を送信した隊員がいたことを知り、紹介させていただく事にした。

まず、『毎日新聞』（二〇・六・二〇）の記事による、湯村伍長の出撃の様子から。

「…出撃の時間が迫り、〇名の特攻隊員が隊長の前に整列した時、あゝなんといふことだ、隊員西義仲伍長が蒼白な顔をして倒れたではないか、胃痙攣の激しい発作だ、西伍長は直ちに医務室に運ばれたが獲物が大きいだけに出撃が一機でも減ることは盛りあがつてゐる基地全体の心に暗い影を射す、隊長は唇を噛んだが命令された時間は厳守せねばならぬ、西伍長の代りを選定してゐる暇はない（中略）整列した見送員のなかから手拭で鉢巻を締めながら西機に向つて駆けだした乗員がゐた、彼は飛行帽を持つてゐない、航空時計も胸に下げてゐない、西伍長を見送りにきてゐた同期生の湯村泰伍長（大阪市）だ、操縦席に半身をいれた、長い列がどよめいた、飛行場上空を旋回する隊長機がうれしげに翼を振りやがて編隊は山の彼方に小さくなつて行ったのである」

会報一三〇号では、「見送りに居合わせた対空無線隊の湯村泰伍長が咄嗟の身代わりを買って出た」という表現をしたが、その認識が誤りであったことも判明した。

以下、陸軍航空通信学校尾上教育隊の『鎮魂』という回想集より引用する。

『トツカンイツキユムラ、タイ、タダイマカラテキカンオオガ　タカンセンニトツニユース、テンノウヘイカバンザイ、オトウサン、オカアサンサヨウナラ、ピーーーー』昭和二〇年五月二七日（※筆者註・実際は二四日）、私は台北の第八飛行師団の師団司令部の耐爆壕の中で、偶然にこの電文を傍受しました。その時の驚きと衝撃は今もって忘れることはできません。（中略）たしか昭和二〇年の三月中旬頃であったと思いますが、ある日突然屏東より藤代部隊副官が来られて、特幹の湯村・松本・轟（※轟氏がこの回想文の執筆者である）・そして少年飛行兵の柳田の四人が、兵舎前（といってもそれは粗末な原住民の民家）に集合させられた。暮色迫る頃であった。『今日は諸君達にとって大変名誉な話をもってきた云々』で、特攻隊要員の参加希望者を募られました。

私達四名はその場で直ちに全員が特攻

隊を志願しました。当時の状況では考える余地も何もありませんでした。藤代副官は大変満足され、私達に対しまして賞賛の言葉を残し、「いずれ連絡する」ということで屏東の部隊本部に戻られました。旬日を出でずして部隊本部より連絡があり、湯村君一名のみが特攻隊要員に選抜され、「直ちに屏東の部隊本部に来るよう」指示された。（中略）

たまたま小生が勤務日に指定された周波数に合せて受信体制をとっていた時に、前述の電文を傍受したわけであります。勿論湯村君が特攻隊として出撃することなど、事前に全く知らされておりませんでしたから、当時宿舎に帰ってから大騒ぎになりました。が、真偽を確かめるすべもありませんでした。大分あとになってから、あの時の電文の主は湯村泰に誤りはなく、彼が戦死したことを知りました。

これもあとで聞いたことですが、湯村君が敵艦船に突入する寸前に打電した生文は、当時大変な物議をかもしたそうです。ご承知のように軍隊では通信はすべて暗号によって行われ、生電文の発信は一切禁止されておりました。最も特攻隊の場合は乱数表は使わず、簡単な符号で通信していたようです。生電文の末尾の『ピー』は特攻機が急降下し、敵船舶に突入するまで電鍵を圧し続ける約束になっていたものです。ピーという発信音が消えた時が特攻機の最後であるわけです。言うなれば湯村君は厳しい軍の規律を犯したことになるわけです。しかし結論的に申し上げますと、湯村君の行為は軍紀云々で非難される前に、今まさに死に直面している極限状態の中で発せられた電文が、よくもこのように正確でかつ少しの乱れもない美しい符号で打鍵できたものだという称賛の言葉の方が多く、軍紀違反は不問にされたということです。

（引用おわり）

この文によって、地上勤務の湯村伍長がなぜ特攻隊員になったのか、経緯を理解することができた。また、発信した電文に対する上層部の反応についての記述は非常に興味深い。

湯村伍長の所属について

通信の話から少し外れるが、彼の所属について判明した部分を紹介する。『第八飛行師団戦果確認表』によると、隊号・「と」第七一飛行隊の出撃隊員の中に

機上通信「と」二八　湯村伍長（渡辺機同乗）という記述を発見することが出来た。

「渡辺」は七一隊の渡辺正美軍曹の事で、出撃当日の攻撃隊の長機となっている。なぜ彼が別の隊の機に同乗したのか、指揮系統の面からみると『戦史叢書　陸軍航空作戦』には「五月上旬、第五航空軍から師団に転属された誠第二八、第七一の両飛行隊は、共に機種が九九式襲撃機で、しかも両隊の編成担任部隊も同一であった。誠第七一飛行隊長以下の能力も考えて、師団では両隊を合併して誠第二八飛行隊長に統一指揮させる・・・」とあることで、二個飛行隊が同一の指揮官（増田幸男中尉）である事が判った。

隊は、概ね四機ずつ、五組の攻撃隊に再編成され、義号作戦当日の五月二四日、一六時四〇分、湯村伍長が同乗した渡辺軍曹機ほか五機で八塊飛行場を出撃したのである。そして、戦史にも、空母突入を報じた機があった事が記録されている。

おわりに

戦後も七〇年以上経過しながら、いまだに戦史に埋もれた人物が大勢いる。現在明らかになっているのは氷山の一角である。会員の皆様も、知り得た事柄について投稿してみてはいかがだろうか。一文、一行でも後世に残すために・・・

おわり

図書紹介

写真集４点を紹介します。

第１は第55振武隊隊長黒木國雄少尉の写真集です。

黒木少尉は知覧からの出撃時に父親が立ち会われた稀有な例の方です。

内容は、夕刊ディリー社による追悼記事、父黒木肇氏の遺稿、部隊勤務の写真本人の日記などです。

特攻振武隊　隊長黒木國雄

手紙・遺言・日記・遺稿オードリーハウス　土持孝博

折れた軍刀

延岡出身・特攻隊長

黒木國雄とその父

終戦特集

わが家の春

第２は同じく第55振武隊隊長黒木國雄少尉のものですが、５分の１程度のページ数で家族との写真、愛機三式戦「飛燕」との写真、隊長であった第55振武隊の隊員との写真などで構成されています。

第５５振武隊隊長　黒木國雄

Ｓ２０・５・１１特攻　オードリーハウス土持孝博

第３は神風特別攻撃隊皇剣隊隊員であった林和博少尉の写真集です。林少尉は特攻待機をしていましたが、出撃機会がなく戦後復員されました。

神風特別攻撃隊皇剣隊林和博

林　和博の軌跡　　オードリーハウス　土持孝博

訓練中の写真や同期の写真、また、戦後の同期との再会写真などです

本土決戦で追撃　北野　和夫

空中戦の巻等の手記、写真　　北野裕美子・土持孝博

第４は12期甲種飛行予科練習生北野和夫一飛曹の写真集です。

予科練や部隊勤務の写真、所属した戦闘第３０８飛行隊の集合写真、写真には殉職者などに印が付けられていて生々しいもの。空戦時の出来事などを記した日記などが掲載されています。

図書入手をご希望の次へお問い合わせ下さい。

宮崎県宮崎市６番26号

コンサート＆ギャラリー

「オードリーハウス」

土田　孝博

電話０９８５－２５－１８９９

連載山ある記11　千葉県「伊予ケ岳」

会員　池田　康博

伊予ケ岳を初めて見たのは、一昨年、御殿山に登る途中の国道88号線上であった。「房総のマッターホルン」という異名のあまりの僭越さと、見ての納得感？に思わず笑ったものであった。今回、その伊予ケ岳を目指した。「房総の三低名山登頂」の仕上げの山でもある。

9時55分に国道88号線上の天神郷バス停の駐車場に駐車、すぐ上にある平群（へぐり）天神社に安全祈願して出発した。登山道はたいへん整備された一本道で、迷うことなく約30分で展望台のある房総丘陵ハイキングコースとの分岐まで来た。ここには東屋もあって見晴らしの良い休憩ポイントである。そして、ここからいよいよ頂上へというその道の傍らに看板があり、「この先たいへん危険です注意してください」と書いてある。なるほどここからロープと鎖を伝って登る岩稜になっている。頂上直下まで約20ｍもあろうか、ちょっとだけ山登り気分とスリルを味わって山頂部に着いた。

登山口から望む伊予ケ岳

伊予ケ岳（南峰）頂上

標高三百三十六・六ｍ、山頂は岩が前方に突き出ているように見え、やっと一人立てるだけのスペースがある。丁度、同じ房総の観光名所である「鋸山の地獄のぞき」に似た感じである。狭い突出部は滑落防止のチェーンで囲われていて、登山者は順番で立ち入るしかないが、しかし、三百六十度の見晴らしが楽しめる。

山頂のすぐ手前の狭いスペースには、テーブルとベンチが備えてある。この山には「北峰」があることを着いてから知ったので、ここでゆっくりコーヒータイムをとってから北峰に向かった。北峰まで6分、10時56分に到着、三角点はこちらにあった。

北峰から見る南峰は、国道から見たマッターホルンに似た形とはちょっと違う山体で残念な感じもあったが、ここでもゆっくり景色を堪能した後、下山の途についた。来た道を引き返して下ること約40分、11時52分に駐車場に着いた。

房総の山で「岳」の付いた山は伊予ケ岳だけだという。確かに頂上部は岩場となっているが、往復で2時間もかからない山であるので、物足りない向きには、伊予ケ岳とは指呼の間にある富山（とみやま）と合わせて登ってみるのもよいと思う。

北峰から望む伊予ケ岳

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

●蛍火に　きみの名前を　そっとよぶ
淳

●征きますと　南にむかう　若桜
笑顔残せし　君を忘れじ
淳子

●ジリジリと　夕立恋うる　暑さかな
よみびとしらず

●乱高下　妻の機嫌とコロナ株

●水補給　ビールがぶ飲み脱水に

●海開き　筋トレ回数急に増え

井下駄マスオ

事務局からの連絡事項

一　第69回特攻平和観音年次法要について

本年も特攻平和観音年次法要が令和二年九月二十二日（火曜・秋分の日）の午後二時から世田谷山観音寺において斎行されますが、今回は３密の回避等、新型コロナウイルスの感染防止への配慮が必要なため規模を縮小し、当顕彰会の役員が代表して特攻観音堂内において実施する事と致します。皆様には何卒ご理解を賜りますようお願い致します。

なお、年次法要にお布施をお寄せいただきました方は、御芳名と共に世田谷山観音寺に奉納させて頂きますので、同封の「郵便払込取扱票」によりお払込みください。（一名分、三千円）

二　年会費未納入の方にお願い

今年度（一月から十二月）の年会費を既に頂いている方には、同封の「郵便払込取扱票」の年会費欄に二重の消去線を入れています。

現時点で未納の方には、消去線を入れていません。また、「年会費納入のお願い」も同封していますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

三　「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。同封のチラシのとおり、３年度のカレンダーはリニューアルしたものとなっています。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。

ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

四　住所等の変更について

現在、会報は、メール便にて皆様にお届けしています。メール便は、あて先が少し違っただけでも事務局に返送され、お届けすることが出来ません。

転居又は地番等が変わった場合には新しい住所名を、また、同居されるようになった場合は、「〇〇様方」まで必要となりますので、電話やメール或は、払込取扱票の空欄に記入して頂くなど、事務局にご連絡下さいますようお願い致します。

寄付者御芳名（敬称略）
（令和２年４月１日～６月30日）
（単位千円）

二〇〇　島崎　宗勝
一〇〇　呉　奈々子
一〇　中溝　二郎
七　森山　正義
七　中田　晃文
七　高橋こすみ
七　菅原　道之
七　橋口　俊一
四　西村　洋文
二　澤田江里子
二　布施木　昭
二　松本　浩一
二　茅野　幸雄
二　木元　和彦
二　林　秀一
二　城ヶ端　専
二　三河内健作
二　野尻　敬生
一　殿谷　章

新入会員名簿（敬称略）
（令和２年４月１日～６月30日）

埼玉　山口　明
千葉　井田　利明
工藤　雅敏
東京　小田部哲哉

会員訃報（敬称略）

東京　島野　雅子
鹿児島　菊永　政広
茨城　金箱　廣美（２・４・16）
埼玉　小沼　彬男（２・４・28）
東京　西村　伸（２・２・11）
竹田　五郎（２・２・12）
野村　浩二（２・４・９）
植田　和男（２・４・12）
岩崎　昭男（２・５・１）
神奈川　林田　隆治（２・４・21）
岡山　岡本　巌（２・２・12）
山口　耕谷　信男（２・３）
福岡　森川　重成（２・６・８）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp

ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

１　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

２　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

３　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

４　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

５　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５－７
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　jimukyoku@tokkotai.or.jp